殺人鬼の日常。

小石　汐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
殺人鬼の日常。

【Ｎコード】
Ｎ２９４５Ｏ

【作者名】
小石　汐

【あらすじ】
殺人鬼と呼ばれた男、南雲　冬夜は銃で撃たれ、一度は死んだ――はずだった。致命傷だったはずだ、と冬夜は考え、走馬灯の中にいるのだ、と結論を出すも、違和感が拭えなかった。そして違和感は、やがて現実となり、歴史は大きく変わってゆく。
そこで冬夜はようやく理解する――この世界も本物だ、と。

＊２０１１／１２／２
ひょうりばーす→代理者の慟哭、と来て、二回目の改稿中です。

真に勝手で申し訳ございませんが、引き続きお付き合いいただければ幸いです。

殺人鬼の最後

立ち並ぶビルの合間、細い路地を照らすのは、大通りから差し込む僅かな光だけだった。そのせいか、奥に進めば進むほど、薄暗くなってゆく。少し先を見通せないほどではないが、路地の奥へと続く闇は恐れを抱くには充分なほどに濃かった。またカビ臭さと、何かの腐ったような臭いが混ざり、鼻をついた。よく見ると、路地には破けたビニール袋が散乱していた。これが臭いの原因だろう。

恐らく、誰もが踏み込むことを躊躇するだろう。しかし、そんな所に一人の男が現れた。動きは鈍く、ビルの壁に手をつきながらも、男は進む。時折、水が滴るような音が細い路地に響くも、大通りから流れ込む喧騒に呑まれていった。

男の名は南雲（なぐも）　冬夜（とうや）と言い、全国指名手配犯の中でも、ダントツの知名度を誇る。無差別に殺してきた人の数は一体どれほどになったのか――もはや本人ですら把握できていない。血の臭いが全身に染み付くほど、屍の山を築いてきた。そのためか、路地に入った当初、充満する悪臭に顔をしかめた。自分の臭いと違うため、余計に鼻についたのだ。しかし、それにもすぐ慣れる。どちらにせよ、後戻りはできない。今、大通りに出たら、どうなるかは簡単に想像がつく。

捕まって、退屈な時を過ごして、最終的に死刑にされるぐらいなら、自らで命を絶ったほうがマシだろうか――冬夜は苦い笑みを漏らしながら、腰に差しているナイフに思いを馳せた。日本の裁判制度は長すぎる。もっとスケジュールを詰めて、さっと執行してほしいものだ、と誰もいない路地に呟いた。

冬夜は一度、後ろを振り返る。幾度か角を曲がったので、大通りからの光も届かない。そんな中、目を凝らす。闇に慣れつつあった目に人影は映らなかった。とりあえず、追っ手はいないようだ。しかし、どこからともなく聞こえてくる怒声に、身を強張らせた。ま

だ近い、と冬夜は更に奥へと足を進める。しかし、そこで気づく。自らの足元に滴る確かな痕跡に。

見つかるのも時間の問題だろう。冬夜は半分諦めながら、壁にもたれかかった。しかし、膝に力が入らず、ずるずると壁に背を擦りながら崩れ落ちる。そして残してきた痕跡に目をやった。自分の腹部から流れ落ちた血液を指でなぞり、苦笑を漏らした。

腹部には二つの穴があった。銃で撃たれたのだ。当初は焼けるような痛みが続いていたが、それも鈍くなり、痛む範囲が広くなったように感じる。止血しようと手で押さえて来たものの、一向に止まる気配は無い。冬夜は諦めて、傷口から手を離した。

刹那、薄暗い路地に小さな光が躍る。来たか、と冬夜は身構えるも、もはや身体が言うことを聞かなかった。血を失いすぎたのだ。恐らく追っ手が持つ懐中電灯か何かの光だろう。でなければ何度も角を曲がっているのに、こんなところまで光が届くはずが無いのだ。詰みか、と小さく零して、冬夜は壁に身を預け、目を瞑った。

そのまま眠りにつけそうな心地に陥る。もう、そのまま目が覚めなければいいのに、と冬夜は思った。むしろ、こんなことになるなら、最初から無駄な抵抗などしなければ良かった。腹部に二発、銃弾を受けてしまった時点で諦めれば良かった。無駄な努力だった、と冬夜は締めくくる。

いつしか臭いや音が消えていた。元々、薄暗い路地であったが、更に暗くなってゆく。そして意識がまどろんでいった。こんな心地で死ねるだけマシなのかもしれない、と冬夜は僅かに安堵の息を漏らした。

ふと目が痛んだ。暗くなりつつあった視界に、光が戻る。しかし、輪郭ははっきりとしない。冬夜の目を刺激するためだけに、鋭い光が向けられたかのようであった。その刺激に応じるかのように、聴覚も少しだけ戻る。面倒くさいと思いながらも、血に濡れた手をかざし、光を遮る。何かが聞こえた。ただ反応を示す余裕など無かった。かざした手すら、再び真っ赤な海に落ちて、血が跳ねた。

刹那、腹部に衝撃が走る。息が詰まり、冬夜は必死に酸素を求めた。これから死ぬと言うのに、酸素を求めるという行為が何とも矛盾しているように感じた。しかし、苦しみたくはない、と自身を納得させた。

「おい、生きてるか」

今度は声を聞き取れた。透き通るような声をはっきりと。その声の方に目をやると、紺の制服に身を包んだ女性が立っていた。見下すような冷たい眼差しが冬夜に注がれる。まぁそれぐらいのことをやってきたしな、と冬夜は苦笑を漏らした。

「笑うな、ゲス」

女はコンパクトなモーションで再び蹴りを放つ。防ぐ間も無かった。固い爪先が冬夜のみぞおちを的確に捉え、再び息が詰まり、吐き気と息苦しさに苛まれる。

それにしても撃ったところを蹴るか、と冬夜は苦い笑みを漏らした。それも仕方が無いことだ、と認識した上で。あれだけ人を殺してきたのだから、殺されそうになった際に文句を漏らすつもりなど無かった。むしろ、さっさと殺せ、と冬夜は呟いた。

「そう簡単に死なせると思う？」

女の言葉に冬夜は絶望する。これから死ぬまでに、どれほど退屈な時間を過ごさなければならないのだろうか、と考えると、ぞっとした。

「……の割には矛盾した行動だな、撃ったところをわざわざ蹴るなんて」

サディストか、と冬夜が尋ねると、再び蹴られた。この女、容赦ない。

「お前には裁きを受けてもらう」

「法廷で？」

そうだ、と女は答えた。それに「冗談じゃない」と冬夜は返す。

「もう自分でも分からないほど人を殺してきたんだ。死刑以外に無いだろう。どっちにしても死ぬんだったら、ここで死んでも同じだ

ろ？」
　むしろ、冬夜が捕まった、なんてニュースが流れたら、遺族がすぐに殺せ、と泣き叫び、怒り狂うのではないだろうか。それなら犯人死亡で、さっさと事を済ませたほうが良いような気もした。人の死は物事を沈静化させる際、絶大な効果を発揮するからだ。
　そんなことを考えながら、冬夜は顔を上げた。影になって女の表情は読めなかった。ただ、僅かな光を反射する両眼に、冷たいものを感じた。
「死刑とは限らない」
「無期懲でも結果は一緒だぜ？」
　暇で憤死する、と冬夜は笑いながら告げる。そして予想通り、冬夜は再び腹部を蹴られた。
「贖罪を暇と言うか」
「お前さんが言うに、俺はゲスだからな」
　大体、罪って何だよ、と冬夜はむせながら呟く。
「昔のお偉い方々が作ったルールを破ってはいけません、なんて馬鹿馬鹿しいと思わないか？」
「それでも人を殺してはいけない」
　当たり前で模範のような答えが返ってきた。これも冬夜の予想通りだった。分かっちゃいないな、と苦い笑みを零す。しかし、蹴りは飛んでこなかった。
「別に人を殺してはいけません、とは誰も言えないだろう。元々、生物ってのは争うもんだ。殺し合うのが当然だ。それを不自然に捻じ曲げるために、人がルールを築き上げたんだ」
　土台を捻じ曲げた上にできた世界なんて壊れるべきだ、と冬夜は言う。それに対する反応は無かった。ただ女の瞳に宿る光が、どこか悲しみの色を帯びたように見えた。
「あなたの常識を疑うわ」
「知ってるか？　常識ってのは、おおよそ成人までに身につけた独断と偏見のことを言うんだぜ」

どこかの天才が言っていた、と告げることはなかった。まるで自分が生み出した言葉のように堂々と言った。実際、常識とはそんなものだ。育った環境に大きく左右される。そして育つ環境は、人の数だけある。同じ家庭に生まれた兄弟でも、そこには兄と弟、そして生まれた時代背景が絡んでくるため、完全に同じ常識になるとは限らない。それは成長するに従って、より大きく変わってくる。結果、生まれる常識は、その人にとっての物でしかないのだ。本当に全世界共通の――それこそ、どこでも常に通る知識なんてあるかどうか怪しいものだ、と冬夜は推測している。

「それでも人を殺してはいけない」

女は模範解答を再び告げた。もはや、話しても無駄であることを悟り、冬夜は大げさにため息をついてみせる。それは呆れだけではない。本当に問答が疲れてきたのもあった。

ふと視線を落とす、と血の海が冬夜の腰を中心にじんわりと広がってゆく。それを見つめていると、不意に意識が遠のいた。がくり、と頭が落ちる。その反動で何とか意識を取り戻すも、抗いがたい眠気が再び冬夜を襲う。それと同時に悪寒が背筋を抜けて、体が震えた。悪寒と眠気が競り合う。簡単に眠気が勝った。こんな状態でも眠れるんだな、と冬夜は静かになってゆく思考の中で呟いた。

その直後、眠ると言うより、意識を失いかけているのだと冬夜はすぐに気づいた。死が近い。今、自分の後ろに死神さんがスタンバイしていると言われれば、即座に信じただろう。そして、さっさと殺せ、と死神に願っただろう。

「救急車は手配しているんだから、死んだら許さない」

身体が前後に揺れる。しかし、その感覚も遠のいていった。恐らく女が自分の体を揺らしているのだろう。それでも、この眠気には抗えない。瞼が落ち、世界が闇に包まれる。そして音も消えていった。

冬夜はしんと静まった闇の中、心地よさを覚えていた。逃亡生活中、一度でもここまで落ち着けたことがあっただろうか。無かった

とは言わない。実際、いつ死んでも仕方ないと考えていた冬夜の逃亡生活に、緊張感は無縁だった。のらりくらりと人を殺しながら、生きながらえていた。それでも、もう逃げる必要がないどころか、何もする必要もない状況は久しぶりだった。やっと休める、とほっとした。

いつしか、それらも消える。闇すらも。意識が完全に途切れたのだ。そして脈拍が止まる。こうして殺人鬼、南雲　冬夜はようやく止まることができた。

ころすということ（前書き）

先に一言。この話の序盤で殺人について、もろもろ書いていますが、私自身が殺人を肯定しているわけではありません。むしろ、自棄になったとしても、私は誰にも迷惑かけずに、ひっそりと死にたい。何もできない人は、何もせずに世界から退場すればいいのです。あ、私事ですので。

ころすということ

人を殺してはいけない――そんなルールが当然のように敷かれている世界だが、実際はそうなのだろうか。

人を殺してはいけない理由として、他人にやられて不愉快なことはしないように、と教える両親や教師がいる。ならば、殺されても構わないのなら、人を殺してもいいのだろうか、と言うことになる。それは自暴自棄になって、無差別に殺人を繰り広げることを認めてしまうことになる。

また別の理由として、誰かが悲しむから、と言う人もいるが、それも先ほど述べた理由と似たところがある。あなたが誰かを殺す。すると、その誰かを知っている人が悲しむ。つまり、あなたの周りの大切な人が殺された時を想像しなさい。不愉快でしょう？　と尋ねているようなものだ。ただ、この場合も不愉快じゃないし、自分の周りに失って困るような人はいません、となると相手は絶句するのだろう。

最後に法律で罰せられるから、と言う人もいる。ただ、それは人を殺してはいけない理由になっていないことを彼らは理解していない。別に人を殺してもいいですよ。ただ、殺した際はそれ相応のペナルティを負ってもらいますからね、と言うのが法律なのだ。もちろん、その刑罰を明確にすることで、抑止力に繋がる。しかし、それは人を殺してはいけない理由にはならない。法律によって守られることを望まなければ、それを守る理由など無いのだ。

守られたい者だけ、守っていればいい――冬夜はそう考えていた。だから、身勝手なのは重々承知で、人を殺し続けた。ただ、殺されてもいいと考える者が、生きるために人を殺すと言うのも、これまた矛盾しているように思えた。しかし、飢餓や寝不足で苦しむのは本望ではない、と簡単に考えて、次々と人を襲った。

そんな冬夜は止まった。ようやく止まれた、と満足感の中、死ん

でいった――はずだった。
「何だ、これは」と冬夜は思わず呟いた。仰向けになって、しかもふかふかで温かいベッドに横になっている。どうしてこんなことになっているのか、理解できなかった。
冬夜は白い天井を見つめながら、必死に記憶を辿る。逃げている最中に撃たれて、そして意識を失って……病院？　そろりと冬夜は首を横に振った。しかし、どう見ても、病室ではない。机とタンスがあるだけの簡素な部屋だった。テレビは無い。ただ、机の上に大きなパソコンが一台置いてあった。床には無造作に服が散らばっている。
どことなく見覚えのある風景に、冬夜は眉をひそめる。掛け布団をめくり、恐る恐る身を起こす。そこで違和感に気づく。むしろ、違和感が無いことに違和感を抱いた、と言うべきだろうか。撃たれたはずの腹部に痛覚や違和感が無かったのだ。
まずは周囲を確認する。人の気配が少しだけするが、その音は遠い。更に部屋の隅まで観察してから、一息吐く。監視カメラも無い。一体何を考えているんだ、と呆れながらも、冬夜は服をまくった。撃たれたはずの腹部に傷は無かった。
そこで再び思考する。撃たれた傷が治ってしまうほど、長く眠っていたのだろうか。しかし、冬夜はそれを即座に否定する。そんな長い時間を眠って過ごしていたら、今こうして身を起こすのも大変だったに違いない。
何かが変だ、と訝りながら、ベッドを抜け出る。足元に散らばる服を踏まないように気をつけながら、部屋を出る唯一の扉へと忍び寄った。そっと扉の取っ手に手を伸ばす。何か仕掛けがあるような重みは無いし、鍵もかかっていない。冬夜はそっと扉を開け、その隙間から外の様子を伺う。先ほど聞き取れた音が僅かに大きくなったように感じた。
どこかの一軒家の廊下のようだった。フローリングがすっと奥に続いて、その先に階段がある。階段が螺旋状になっているのか、下

のフロアまでは見通せない。ただ、ここが二階以上であることだけは確かだった。
それと同時に僅かな隙間から流れ込んでくる香りは、どことなく懐かしさを覚えた。しかし、それを振り払うように、冬夜は扉をそっと閉めた。人の気配がする以上、先に進むのは危険だと判断したのだ。何故こんな状態になっているのか分からないが、傷も塞がり、体調はほぼ完璧に近い状態なのだから逃げることも可能かもしれない、と冬夜は考え始めた。足音を消したまま、部屋の中央に立つ。そして二つの選択肢を見やって、冬夜は考える。
冬夜の視線の先には窓が二つあった。どちらも普通の窓のようで、薄いカーテンが陽光を程よく遮っていた。直接触れるのは気が引けたが、この部屋にある物を利用しても結果は似たようなところだ。何かしら痕跡が残る、と考えた所で、冬夜はふっと息を吐いた。痕跡も何も、先ほどまで自分はあのベッドで寝ていたではないか、と苦い笑みを零し、そこから冬夜の行動は大胆になった。
机の上にあったシャープペンを手にとり、カーテンを開いた。そこには普通の窓があった。これなら、すぐに逃げ出せるかもしれない、と思えるぐらいに普通だった。しかし、冬夜は硬直する。まるで、そこに罠があるのを発見したかのような、驚愕の表情で窓を見つめていた。否、正確に言うならば、窓の外に広がる風景だろうか。しばらく、それを見つめた後、何かに気づいたように冬夜は部屋を振り返った。
まさか、と小さく呟く。ここは――。
「俺の、部屋？」
何年も昔に逃げ出した場所に、冬夜は立っていた。何の冗談だと笑い飛ばそうと思っても、頬は自然と引きつる。あの女が、ここに自分を運んだのだろうか。それこそ余計なお世話だ、と内から熱が湧き上がった。
殺してやる、と明確な殺意を持ったのは久しぶりだ。今までは成り行きで面倒くさくなり、結果的に殺すことが多かった。殺すこと

が目的なのではない。別の目的があり、それに向けて行動を起こしている内に殺すと言う結果に辿り着くケースが多かっただけなのだ。そのため、久しく湧いた感情のコントロールに手間取る。むしろ、コントロールする気も失せた。冬夜は乱雑に扉を開けて、廊下に出た。

それと、ほぼ同時に廊下にあった一つの扉が開いた。そして顔を覗かせた少女が目を丸くして、冬夜を見つめる。そして冬夜も硬直した。

「ど、どうしたの、兄ちゃん」

尋ねられていることは理解している。しかし、今の冬夜に答える余裕は無かった。溢れ出しそうなほど疑問符が浮かび続け、頭の中が詰まりパンクしそうだった。情報過多だった。その一言と彼女に出会ったことで、大体のことは把握できたものの、何故そうなっているのかが分からなかった。むしろ、こんな状態になるはずがないのだ。

「もしかして、気分良くなった？」

驚きの色が薄くなり、少女の瞳に期待の光が宿る。しかし、それにも答えられない。やがて、少女は失望したかのように肩を落とした。「もういいよ」と小さく不貞腐れたように零すと、冬夜に背を向けて階段を下りて行った。

冬夜は一人廊下で立ち尽くす。ようやく疑問符が少しずつ消えてゆき、思考の余裕が生まれた。そして結論は驚くほど、あっと言う間に導き出される。

「走馬灯、か」

後頭部を掻きながら、ため息をつく。そして冬夜は階段を下りていった。走馬灯なら遠慮なく立ち振る舞おう。もはや、足音に気を遣う必要も無い、と冬夜はリビングに向かった。懐かしいな、と冬夜は玄関などを一瞥し、思わずため息を漏らす。それが安堵と呆れが混じったような息だった。

そしてリビングへと続く扉を開く。その瞬間、時が止まったよう

に感じた。母も父も妹も、皆自分を見て、固まったのだ。テレビから流れるニュースと、フライパンに熱された何かが鳴いている。それ以外の音は無かった。
おはようと、母がぎこちなく言う。それにさらりと答えながら、冬夜は食器棚を開いた。
「朝ごはん、すぐに準備するから」
冬夜はコップを取り出して、食器棚を閉めた。
「いいよ、別に」と冬夜は断る。何か言いたそうな母の横を通り過ぎて、キッチンに入った。そして蛇口を捻って、コップに水を注ぐ。それを一気に飲み干してから、冬夜は再び口を開いた。
「朝は食べられる気がしない」
そして、もう一杯水を飲み干して、コップを置いた。
「じゃあ、お昼、お弁当は？」
弁当？　と冬夜は思わず聞き返した。その際に制服姿の妹の姿が視界に入り、納得する。まだ自分が学生だった頃の走馬灯なのか、と。それにしても今はいつなのだろうか、と冬夜は内心で首を傾げながら、とりあえず弁当の申し出を断った。「そう」と母は悲しそうに目を伏せた。何も言わなかった父と妹も、どことなく暗い表情で黙々と朝食を口に運んでいた。それにしても良い匂いだな、と母の手にあるフライパンに目をやると、ウィンナーが焼け、ぱちぱちと鳴きながら跳ねていた。
「それ、一つだけ貰っていい？」
そう言って、冬夜はフライパンに手を伸ばした。許可を得る前にフライパンに乗ったウィンナーを手にし、口に運んだ。予想以上に熱かったが、噛み潰すと肉汁が口内に広がった。それがまた熱く、苦労しながら飲み込んだ。喉元過ぎれば熱さを忘れる、ってのはウソだ。胃の中に広がる熱は気味が悪く、冬夜を苛んだ。
そして母に背を向けて、リビングを後にしようとする。さて、どうしてくれようか、この走馬灯、と考えながら、扉に手を伸ばした所で、「冬夜」と呼び止められた。低く、重圧な声だった。それに

答えることなく、冬夜は振り返った。父が渋い顔で口を開く。
「高校ぐらいは出ておけよ」
「出て、何か得するなら」
冬夜は悪気もなく、率直に返した。そして何か言いたげに口を動かす父に背を向けた。待て、と声が聞こえる。しかし、冬夜は無視した。そのまま階段を上り、自室に戻った。そしてベッドに再び横たわった。まだ肌寒く、掛け布団の中に身を滑り込ませる。
「……案外、暇だな」
白い天井を見つめたまま、冬夜は呟いた。やがて、ばたばたと廊下を走る音が僅かに聞こえてくる。そして「いってきます」と妹の夕夏（ゆうか）が玄関を出ていった。
部屋を区切る扉と違い、玄関の重厚な扉を開け閉めすると、家全体に音が響く。どこに行くにも誰かに知られてしまうのを嫌い、冬夜はいつしか玄関の扉を音無く開け閉めすることが得意になってしまった。それが後々の逃亡生活でも役に立ったのだから、人生で何が役に立つかなんて分からないものだ、と今更思い耽った。
それにしても退屈だ、と冬夜は思う。あの頃の自分は一体何をしていただろうか、と思い出そうとしても、その後に刻んだ記憶が斬新すぎて、記憶が霞んでいた。とは言え、パソコンに向かっていたような気がするな、と冬夜は布団から抜け出て、パソコンを起動した。
「……遅ぇ」
電源ボタンを押し、パスワードを打ち込む画面まで、しばらく待つ。そしてパスワードを打ち込んでから、更に待ってようやくデスクトップの画面が表示された。一体どんなオペレーションシステムを使っているんだ、と考えて思い出す。窓社の二〇〇〇だ。
ようやく起動したブラウザのお気に入りを漁る。ああ、そういえば、と冬夜は思い出す。ウェブ漫画や小説のリンク、またはオンライゲームのホームページなどが整理されずに並んでいた。漫画でも読み直そうか、とリンクをクリックする。しかし、ブラウザの動き

は酷く遅い。三ページほど進んだところで、次のページを長々と読み込んでいるパソコンを強制終了した。
再び暇になった、と冬夜はベッドに転がった。時計を見ると八時半になり、そろそろ学校も始まる頃だった。今から行ったところで遅刻は決定なのだが、如何せん、この暇が酷い。散らばった服を漁ってみると、随分と下のほうに制服が埋もれていた。いつから学校に行っていないのだろうか、と思い、月日を確認するために部屋を出た。
リビングには母しかいなかった。父はもう仕事に出たのだろう。
「どうしたの？」
テレビを見ていた母は冬夜の姿を見ると、柔らかく微笑みながら言った。しかし、その瞳の光が僅かに揺らいでいるのを冬夜は見逃さなかった。
「いや、暇だなって」
学校でも行こうかな、と零すと、やはりと言うべきか、母の表情は一気に明るくなった。
「でも、お昼はどうするの？」
「購買で何とかする」
「お金あるの？」
そこで冬夜は首を傾げる。我ながら間抜けだったと思いながらも、確認しなければ分からない。と言うか、走馬灯なのにお腹が空くのだろうか、と考えるとおかしくなって、つい笑みが漏れた。ある、と答えて、冬夜はリビングを後にする。
家を出て、途中でコンビニに寄ろう。そこで週間雑誌などでも立ち読みして、今がいつなのかを調べるつもりだった。なかなか自由度の高い走馬灯に満足しながら、冬夜は着替えた。再び制服に身を包むことがあろうとは――込み上げる恥ずかしさを一瞬で噛み殺して、冬夜は家を出た。そして自転車に跨り、ペダルを踏んだ。
まだ学校に通っていた頃、よくお世話になったコンビニで自転車を降りた。当時、帰宅の途中に寄っていたので、登校中に入ったこ

とはなかった。女性店員の訝るような視線に対し、冬夜は軽く睨み返す。いらっしゃいませ、と店員は目を逸らしながら言った。

そして本棚に向かって、雑誌を手に取り、開く。そこの記されている日付を見ても、ぱっと思い出せないために逆算するハメになった。結果、今が高校二年の春であることが分かった。自分が学校に行かなくなり始めた頃だ、と冬夜は思い出す。これだけは忘れもしない。何を隠そう、自らが殺人に走るきっかけが、この年に生まれるのだから。冬夜からすれば記念の年と言っても過言ではなかった。そうか、この年に俺は人を初めて殺したんだな、と考えると、感慨深いものがあった。

雑誌を一通り読み終えると、それを元の場所に戻す。そして店員の冷たい視線を背中に感じながら、冬夜はコンビニを後にした。長居は良くない。学生服で、こんな時間にコンビニにいたら、宿敵の警官に補導されてもおかしくないからだ。たとえ走馬灯であっても、警官のお世話になるのは気が進まない。長い逃亡生活のせいで、警官は敵だという意識が抜けなくなっていた。

自転車に跨り、学校に向かって、のんびりと漕ぐ。既に遅れているのだから、急ぐ必要も感じられなかった。懐かしい風景に目を細め、冬夜は故郷の空気を吸い込んだ。まだ冬の残滓を感じさせる空気の冷たさと車が吐き出す排ガスの臭いで、少しむせた。幹線道路を車が颯爽と抜けてゆく。渋滞のピークは過ぎたようだった。

冬夜は腕時計に目をやった。時計は既に九時を回っている。仕事でも学校でも始業の時間だろう。ならば、ここを走っている車は一体何をしているのだろうか、と少し首を傾げながらも、一瞬でその疑問を忘れた。

やがて、学校に着く。誰一人、制服姿を見ない通学路と言うのも、これまた不思議なものだった。自分だけ妙に目立っているのではないか、と冬夜は気が気でなかった。これも逃亡生活の癖なのか、あまりに目立つ行為は避けたかったのだ。そのため、校門を通り、自転車置き場までやってきて、冬夜は安堵の息を漏らした。

自転車を適当に止めると、下駄箱へと向かった。ふと桜のような澄んだ香りが鼻をつく。冬夜は足を止めて振り返った。自転車置き場の奥にある桜が風に揺られ、花びらが雪のようにはらはらと舞い降りた。満開は過ぎているのは、桜に詳しくない冬夜にでも分かった。もう四月も後半に入っているのだから当然だ。雨が降れば、一瞬にして花びらが落ちるだろう。冬夜は興味なさそうに背を向けた。

下駄箱を訪れると、やはり二年生の所に冬夜の上履きがあった。それと履き替えて、廊下を歩く。どこからか授業を進める教師の声が聞こえてくる。それ以外は音が無く、静かだった。階段を上り、教室を目指す。記憶が正しければ、ここのはずだ。冬夜はクラスの番号を確認して、扉を開いた。刹那、空気が止まる。視線が自分の下に集まるのを感じながらも、冬夜は素知らぬフリで教室に踏み込んだ。俺の姿を見たら、一度は誰もが固まる――それに何とも言えない居心地の悪さを覚えて、やはり居場所なんて無かったんだな、と冬夜は小さく息を吐いた。

当時、自分の席がどこだったかまで覚えていない。教室中を見渡して空いている席を探すと、二つあった。どちらだろうか、と冬夜は悩む。確かあちらの席だったと、あやふやな記憶に従って足を進めた。

「おい、南雲」

呼び止められて、振り返る。教師が手を差し出していた。

「遅刻届けは？」

教師の目は笑っていなかった。厳しい目つきで、冬夜を見ている。

「それに遅れてきたら、言うこともあるだろう？」

最初からやり直して来い、と教師は言った。急に白けた。冬夜はそんな教師から視線を逸らして、大きくため息をついた。その態度が気に食わなかったのか、教師の眉間に皺が寄る。「何だ、その態度は」と今にも言い出しそうな雰囲気に、冬夜は微笑む。

走馬灯だ、自由なのだ。肩に掛けていた鞄を、するりと落とす。身が軽くなった。そして床を三度蹴り、教師との距離をゼロにする。

教卓にあったボールペンを掴み、教師の首筋に向けて振るった。それを綺麗に寸前で止める。出ていない芯をかちりと押し出すと、ペン先が喉に触れて、黒い点をつけた。

それだけで充分だった。教師は一歩も動けず、状況を把握してから、ようやく腰が抜けたように教卓の影に崩れ落ちた。そして手にしたペンを教卓にそっと置く。冬夜は何も言わずに振り返った。クラスメイトの視線に一瞬気圧されながらも、自らの鞄を取るために足を踏み出した。

結局、何をしにきたのだろうか、と冬夜は考えながらも、鞄を拾い上げて教室を後にする。それと同時に授業の終了を告げるチャイムが鳴り響いた。

廊下に出ると、先ほどとは違って、音が溢れていた。椅子を引く音があちらこちらの教室から響き、やがて声が漏れてくる。誰もいなかった廊下に人が出てくる。授業を終えた教師や、馬鹿はしゃぎした男子生徒などを無表情で抜き去りながら、冬夜は下駄箱へと向かった。

「冬夜？」

そんな冬夜を呼び止める者がいた。これが嫌だったのだ。冬夜は小さく舌打ちを漏らしながら、振り返った。久しぶりだな、と笑いながら言う男が視界に入った瞬間、冬夜は全身の毛が逆立ちそうになるほどの感情が爆発的に生まれた。冬夜が明確な殺意を抱くのは珍しい。しかし、今日だけで二度も殺意を抱いていたら、説得力も無さそうだが、それは事実だった。

目の前が真っ赤になる。八つ裂きにしたい衝動に駆られるも、今は武器が無い。筆箱の中にコンパスや定規などがあるが、それらを取り出す時間が惜しかった。今すぐに目の前の男を殺してやりたい、と握りこんだ手に力が入り、骨が鳴った。

しかし、瞬時にそれをコントロールする。走馬灯なのだから、別に構わないのではないかと考えながらも、周囲の目が気になり、今はすべきではない、と判断したのだ。それは、もはやクセだった。

衝動を飲み込む際に、少し顔を伏せる。そして次の瞬間、冬夜が顔を上げると無表情になっていた。そして目の前の男、上村　祐介を興味なさそうに見つめていた。
「何か？」
「おいおい、用が無かったら、話しちゃいけないのかよ？」
少し驚きながらも、上村は苦い笑みで答えた。
「学校、来る気になったんだな？」
「気まぐれでな」
飲み込んだ衝動は、喉元を過ぎて落ち着いた。熱い物を飲み込んだ時とは違うのだな、と小さく呟いた。
「ん、どうかした？」
何でもない、と返して、冬夜は上村の横を通り過ぎる。
「お、おい、荷物持って、どこ行くんだよ？」
案の定、上村は慌てて冬夜についてくる。あまりにも予想通りすぎて、冬夜は思わず苦笑を漏らした。こういうヤツなのだ。人の気も知らないで、ずけずけと踏み込んでくる。そして人の居場所を奪っていった。一瞬、吐き気を覚えるも、それは現実のものではなかった。飲み下した衝動が再び喉元をせり上がってくるかのような感覚だった。
衝動を再び飲み下して、冬夜は「帰る」と返す。すると「何で？」と尋ねられた。
「それを知って、どうする？」
お前には関係ない、と冬夜は突き放した。しかし、上村はなかなか離れない。じりじりと衝動が喉の壁を上ってくる。
「理由を知れば、何とかできるかもしれないだろ？」
余計なお世話だ、と冬夜は鼻で笑ってみせる。
「お前が原因だよ、言うまでもないだろうが」
その瞬間、上村は目を剥いた。そして悲しそうに目を伏せながらも、足を止めない。未だ、冬夜の横に並んでいた。
「やっぱり、怒ってるのか？」

「そんな気がする」
冬夜の返答が曖昧になったのは、確信が持てなかったからだ。もう遠い昔の記憶だ。今、覚えているのは圧倒的な殺意だけで、それが生まれた原因となる感情を思い出せなかった。ただ、その感情を生み出した原因なら、冬夜は覚えていた。
「別に気にすることはねえよ。お前は良いヤツだ、夕夏と付き合えばいいさ」
どこかで言ったことのあるセリフを思い出して、冬夜はそれを棒読みした。しかし、もはや感情は湧いてこない。二人が付き合いだした当時、自分はどんな気持ちで、その言葉を吐いたのだろうか――冬夜は、それを思い出すことができなかった。
「だからさ、もう帰ってもいいか？」
「いや、そんな当然のように帰るって……良くねえと思うんだが」
それに、と上村は続ける。
「部活、どうするんだ？　先生、もう怒りも呆れも通り越して、心配してるぜ？」
そう言えば、と冬夜は思い出す。学校に顔を出すことがなくなり、それと同時に部活も行かなくなった。結果的に、それは冬夜が初めて人を殺すまで続き、学校も部活も自然と戻れなくなった。
つまり、この頃はまだ周囲が冬夜のことを諦める前だったのだろう。面倒くさいと思いながらも、現状に不思議な心地を覚えていた。走馬灯に出てくる人に心配されてるって、どういうことだ、と。
「辞めるなら辞めるって伝えにいけ、ってことか？」
どうせ結果的に辞めるのだから、と冬夜は肩を竦めながら答えた。すると、上村は大げさに首を横に振った。
「違う、何でそうなるんだよ。今まで、ずっと一緒にやってきたのに」
上村の声は怒気をはらんでいた。しかし、怒られる筋合いは無い、と冬夜は更に突き放す。
「俺の自由だろうが」

「自由だけど、勿体無い。それに辞める理由は？」
飽きた、と返すと、上村は一瞬口を開いたまま、固まった。やがて頬が引きつり、眉が釣りあがる。来る、と冬夜は体を反った。目の前を上村の拳が抜けてゆく。少し目測を誤ったのか、上村の拳は鼻先をかすめていった。そのまま冬夜の身体は後ろに倒れてゆく。その体勢を利用して、冬夜は足を振り上げた。無防備な上村の首筋に、冬夜の爪先が綺麗に入る。そこで振り抜かずに、当てた瞬間に足を引いた。綺麗なハイキックだった。ただ振り抜いていない分、ダメージは軽かったようだ。上村は廊下に膝をつき、咳き込みながらも冬夜を睨み上げていた。
「良かったな」
今、武器が――刃物があったら、確実に殺していたぞ、と冬夜は心の中で呟いた。
そして、これまた随分と目立ったものだ、と冬夜は眉をひそめる。休み時間だと言うのに、廊下はしんと静まり、視線は冬夜と上村に注がれていた。そこから逃げるように、冬夜は上村に背を向けて、下駄箱に向かって歩き出した。本来なら教師に呼び止められて、怒られるぐらいの出来事なのに、誰も冬夜を止めることができなかった。しばらく顔を出さなかった冬夜の変貌に、誰もが声をかけることを躊躇ったのであった。

ころさないということ

どこかで時間を潰すことも考えたが、こんな時間に制服で出歩いていては目立つと考え、冬夜は寄り道もせずに家に帰った。母に「どうしたの」と尋ねられ、「面倒くさくなって帰ってきた」と告げると、肩を落とした。少し悪いことをしたような気がしたが、そんな小さな罪悪感は一瞬にして消え失せる。

着替えを済ませて、冬夜はベッドに転がった。もうパソコンを起動する気にはなれなかった。眠ろう、と目を瞑る。しかし、なかなか眠りにつけず、冬夜は身を起こした。無駄に長く、精密な走馬灯だな、思わず皮肉を零し、空腹を訴えかける胃を恨みながらも、階段を下りる。何か無いだろうか、とインスタント食品を探していると、母がリビングに顔を出した。

「お腹空いたの？」

その通りだったので、冬夜はうなづく。すると、母は「ご飯にする」と台所にやってきて、尋ねる。

「何がいい？」

冬夜は「何でもいい」と返した。実際、空腹を満たすものなら、何でも良かった。そのため、調理が簡単なインスタント食品を探していたのだ。結局、炒飯を作ることにしたようで、母は冷蔵庫から野菜を取り出していた。

料理ができるまで、冬夜はぼんやりとテレビを眺めながら考える。ここまで走馬灯が長引くことなんてあるのだろうか。それを知るには、走馬灯を経験した人に聞くしかない。しかし、そんな稀有な体験をした人は身近にいるはずもない。

ただ、冬夜にとって走馬灯とは、人生のダイジェストを一瞬で眺めるようなイメージだった。しかし、これは違う。時の流れすら正確なのではないかと思うほど、精密な世界が存在した。記憶に無い箇所が、ぼんやりと霞んでいるわけでもなく、目を凝らせば全てを

見てとれる。当時、絶対あんなところを見ていない、と言い切れる箇所に目をやっても、そこに何があるのか、はっきり見えるのだ。過去の記憶から推測して、世界を作り上げているのだろうか、と冬夜は考える。それなら、それでいい、と冬夜はため息をつく。

それとは別に、こうも長々と走馬灯を見るのは、今も自分の身体が集中治療室で手術を受けており、生死をさまよっているのではないだろうか、とも考えた。それなら、さっさと殺して欲しいものだ、と冬夜は小さく息を吐く。どうせ生き延びたって、退屈な時間を過ごし、結果的に死刑になるのだから。たとえ、無期懲役だったとしても、そんな退屈な時を過ごすぐらいなら、首を吊ってでも死んでやる、呟いた。

はい、と母が皿を持ってきた。そこに乗った黄色い米が、良い匂いを放つ。いただきます、と言って、冬夜はスプーンで炒飯をすくった。熱い、そして美味しい。玉ねぎの風味が程よく残り、口内に広がる。精密な走馬灯で良かった、と冬夜は炒飯を一気にかきこんだ。

程良く胃袋を満たし、しばらくすると眠気がやってきた。ぼんやりとテレビを眺めるのも久しいことだったが、平日の昼間に興味を引くような番組は無かった。暇だ、と呟いて、冬夜は席を立った。そのままリビングを後にして、自室へと向かう。散乱した服を構うことなく踏んで、ベッドに横たわった。

現状に関する仮説は二つある。実際は三つあったのだが、それはあり得ない、と冬夜は一番最初に切り捨てた。

まずは一つ目、現状はこの仮説の上に行動を取っている。この世界は走馬灯だ。今頃、生死の境をさまよっている自身の身体を医者たちが必死にいじり回しているのだろう――ぞっとする。

ただ、この世界は本当に走馬灯なのだろうか、と疑念が湧いてきているのも否定できない。味覚、聴覚、触覚、視覚、嗅覚。それら全ての情報が生々しかった。走馬灯クオリティとは、そんなものなのかもしれない。今まで脳に蓄積された感覚の全てを動員して、走

馬灯のクオリティを底上げしているのかもしれない。だとすると、人の脳は凄いものだ、と冬夜は素直に感心した。

しかし、それでも一つだけ解消されない問題がある。この走馬灯仮説を根本から揺るがす問題――それは冬夜が自由に振る舞えていることだ。冬夜は、ここまでで既に記憶とは、かなり違った行動を取っている。走馬灯とは、そんなものなのだろうか、と経験の無い冬夜は考えるも、やはり走馬灯で済ますには、どこか納得がいかなかった。

だから行動方針を変えるべきか、と冬夜は思案する。もう一つの仮説に従って動けば、無難にはなる。しかし、それはそれで退屈になるだろう、と冬夜は思わずため息をついた。二つ目は、一度は死んだと思っていた世界は夢でした、と言う仮説だ。冬夜は人をたくさん殺してきたが、それは全部夢の中だった、と言うことになる。こんな馬鹿な話があるか、と冬夜は思う。この仮説には決定的な欠陥があり、それを見つけるのも、そう苦労しなかった。

痛みだ。幾度と無く銃で撃たれ、刃物で切りつけられ、警棒で殴られ、とたくさんの痛みを経験してきた。あれらの説明は脳が自動再生しました、では済ませられない。度を超す痛みには熱さを感じると知ったのは、あちらでの経験だ。つまり、蓄積された感覚から、それを再現する力はないはずだ、と冬夜は考える。それに夢とは痛みを感じないものだ。それだけは冬夜も確信を持って言える。幾度と無く夢を見てきた中で、銃で撃たれることもあったし、刃物で突かれることもあった。しかし、そこに痛みはなかった。目覚めた際に少し気分が悪い程度だった。

二つの考察を終えて、残った一つが異様な存在感を放っていた。あり得ないと分かっていて、笑い飛ばせるぐらい、ぶっ飛んだ仮説であることを理解しながらも、冬夜はそれを無視できなくなっていた。しかし、それは無い、と再び否定する。

時が遡った、だなんて。

「……下らん」

小さく呟いて、冬夜は目を閉じた。布団が温まり、眠気に抗いがたいものになっていた。それに身を委ね、試行を停止させた。

＊

やがて、冬夜は目覚めた。否、騒がしい物音に起こされたと言うべきだろうか。不機嫌そうに眉をひそめながら、冬夜は身を起こそうとした。しかし、その瞬間を見計らったかのように、腹部に衝撃を受ける。それで冬夜の意識は一気に覚醒する。重い掛け布団を無理矢理はがし、中腰になって構えた。しかし、襲撃者を見て、一気に力が抜ける。

「兄ちゃん、祐介さんを蹴ったんですって！？」

夕夏は冬夜の袖を掴み、わめく。目は血走っており、不用意な発言は控えるべきだ、冬夜は一瞬で悟った。

「やっと学校に顔出したと思ったら、何してんのよ！」

無駄だとは思いつつも、冬夜は事実を告げてみる。

「いや、先に殴りかかってきたの、あいつだぜ？」

実際、先に殴りかからせるような挑発をしたのは冬夜だが、それは意図的に言わなかった。しかし、それを聞いた夕夏の反応は予想外だった。

「知ってる」

「知ってるの？」と呟きながらも、冬夜は思わず耳を疑った。

「祐介さんが言ってた。先に殴りかかった俺が悪いから、兄ちゃんを責めないでくれ、って」

完全に悪者じゃねえか、と冬夜は内心で苦笑を漏らす。ただ、そこまで気にすることはなかった。その程度で罪悪感を抱くほど、冬夜は弱くなかった。否、弱くないと言うよりは、健常ではない――異常だった。

「でも……何で？」

夕夏は叫ぶ。目尻に涙が溜まっていた。それは今すぐにでも溢れ

出しそうだった。思わず冬夜は目を逸らしそうになった。事実を話すべきか、と冬夜の心が揺らぐ。上村を恨んでいる、と言うべきか一瞬だけ迷った。

しかし、夕夏の後ろに母の姿があったので、出かかっていた言葉を全て飲み込んだ。恐らく、母は騒ぎを聞きつけて、やってきたのだろう。あまり事態を理解できていないのか、顔を青くしながら冬夜と夕夏を見つめていた。

「……部活の件でもめてな」

「知ってる、辞めるんでしょ」

聞いたのか、と冬夜が呟くと、夕夏は小さくうなづいた。

「祐介さんの言うとおりだよ、勿体無い。今まで兄ちゃんの努力を知ってるから、辞めてほしくないんだよ」

なのに辞めるの？　と夕夏は尋ねた。それに冬夜は迷うこともなく、うなづく。

「辞める。できれば学校も辞めたいな」

もう何もかもやめたい、と喉元まで出かかったが、それは飲み込んだ。しかし、それは冬夜にとって偽らざる本音だった。

しかし、部活だけでなく、学校も辞めたいと言っただけで、夕夏と母は固まった。それを見て、その後の言葉を飲み込んで良かった、と冬夜は心密かに胸を撫で下ろした。

「冗談だよ」

学校は、と冬夜は最後に付け加えた。ただ学校を出たところで、本当に自分のためになるとは思えなかった。逃亡生活中に見てきた世界は、不景気のどん底を突き破って、更に奥深くに沈んでゆくように見えた。学校を出ていれば、多少はマシだろう。しかし、結局はその程度だ。マシなだけで苦しいことには変わりない。

それに対し、冬夜は気が向いた時に人を殺し、それが発覚するまで住居とお金を自由に使い、気ままに生活していた。時に警官に追われたりもしたが、平和な日常に振りかけるスパイスとしては上質なものだった。

どれほど憎まれようと、冬夜は決して不幸な人生を歩んできたとは思わなかった。ただ、そう思う時点で、既に人として大事な部分を失っているのだろうな、と冬夜は理解した上でのことだった。既に自分は壊れている。大事なネジを失ってしまったのだ。

「話がある、って」

夕夏がぽつりと呟いた。自由気ままな生活に思いを馳せていたため、冬夜は少し反応が遅れた。

「は？」

「だから、祐介さんが話したいって言ってたの」

夕夏はじっと冬夜の瞳を見つめたまま続けて言う。

「祐介さんが怒るなって言ったから、私は何も言わない。けど、祐介さんとはちゃんと話をして、絶対」

もう既に怒ってたじゃねえか、と冬夜は小さく呟く。「何？」と夕夏に凄まれて、冬夜は目を逸らした。

「今晩十九時、河川敷の公園で待ってる、って」

話したって無駄だと思う。むしろ、そんな人気の無いところに誘い出して、上村は何を考えているのだろうか、と勘ぐった。しかし、このときの上村は冬夜に殺されるだなんて、夢にも思っていなかったのだろう。殺しやすいか、と冬夜は小さく息を吐きながらも了承する。

「分かった」

「ちゃんと謝ってよね」

分かった、と冬夜は再び返事をした。謝るどころか、これから上村を殺そうと考えているのに。

二人が部屋を出ていき、足音が遠ざかるのを確認してから、冬夜は部屋の扉をそっと閉めた。そして机の引き出しをかき回す。何か武器になるものはないか、と必死に探す。その顔に笑みが浮かんでいることは、本人の冬夜すら気づいていない。

やがて、冬夜の手が止まる。そっと引き出しから抜いた手には、大きなハサミが握られていた。裁縫などで布を切る際に使うハサミ

で、切れ味はそこそこある。突きには向いていないことを認めつつも、これは使えると冬夜は確信していた。硬すぎず、柔軟性に富んでいることから、折れにくいだろう。ただ相手の攻撃を受ける際は、この柔軟性がどんな働きをするのか、クセを見極めて使う必要がある。

大体の考察を終えて、冬夜はそれを机の上に置いた。そして宙に向かって手を伸ばす。最初は酷く鈍い動きだった。しかし、徐々に速度が増し、動きも鋭くなってゆく。手を振るう度に、僅かに床が鳴く。しばらく身体を動かして、冬夜はまじまじと自らの両腕を見つめた。違和感があった。何とも言えない違和感が。イメージ通りに身体が動いてくれず、冬夜は少し苛立った。乱暴にベッドに腰を下ろし、壁に掛けられた時計を見た。随分と眠っていたらしい。時計の針は十七時を示していた。

＊

「……で、何でお前まで来るんだよ」

尋ねるのではなく、責めるような口調で、冬夜は隣の夕夏に言った。

「ちゃんと謝るか、心配だし」

しれっと夕夏は答えるも、その心配はある意味で的中していた。冬夜のポケットには、引き出しにあったハサミが入っている。家を出る前に多少の改良を加えて、これから試し斬りだ、と冬夜は胸を躍らせていた。しかし、夕夏がついてくるとなると、話が変わってくる。がっくりと肩を落としながらも、夕夏を帰らせる方法を考える。

「絶対に謝る」

もちろん嘘だが、冬夜はさらりと言ってみせる。それどころか、反省の色を見せずに殺しに向かっているところだ。

「なら、私が一緒しても問題無いでしょ？」

うん、確かに、と冬夜は思わずうなづいてしまった。
それから会話はなく、アスファルトを淡々と踏みしめながら、待ち合わせの河原へと向かった。その後を続く夕夏の足音だけが冬夜の耳に届いた。
街灯がいくつも並び、近くを通り過ぎる度に電磁波を放っているような音が聞こえた。実は街灯の中に特殊な電波照射機が組み込まれていて、知らぬ間に洗脳されているのかもしれない、と冬夜は考えてみたが、どうでも良かった。
既に日は沈み、星が空で瞬いていた。昼間は随分と暖かくなってきているものの、夜はやはり寒い。夕飯を食べたばかりで身体が火照っているせいか、外気の冷たさがより沁みた。少し忠実に再現しすぎだよ、走馬灯さん、と内心で呟いてみるも返事は無く、寒さが緩和されることもなかった。
やがて、道は緩やかに上り、二人の視線の先に堤防が見えた。そこを越えれば河川敷の公園がある。ふと耳を澄ませると、何かの音が聞こえた。懐かしい音だった。二回続けて音が聞こえて、しばらくの静寂。そしてまた音が二度続けて、静寂が訪れた。それは堤防に近づくにつれて大きくなっていった。音の主は言うまでもない、上村だ。冬夜がやってくるまで、ボールを蹴っているつもりなのだろう。
結局、夕夏を振り切ることもできず、ここまで来てしまった。どうしたものか、とあまり悩む様子もなく、冬夜はぼんやりと考えていた。
既に冬夜と夕夏は堤防のすぐ傍までやってきている。そこで唐突にボールの音が止んだ。代わりに怒声が二人の下まで届く。一瞬だけ夕夏と顔を見合わせて、冬夜は堤防を駆け上った。河川敷を見下ろすと、街灯のか細い光の下に上村の姿があった。その近くに人影が三つほど視認できる。冬夜は状況を把握するために目を凝らし、耳を澄ませた。
「お金なんて持ってません」

上村の声は少し震えていた。なるほど、と腕を組みながら、冬夜はのんびりと光景を見下ろしていた。これなら手を出すまでもなく、上村は死んでくれるかも、と薄い笑みを浮かべながら。

ああいった輩が取る行動は限られている。まずはお金を要求、持っていなければ八つ当たり――つまり、リンチだ。多人数で暴力を振るう場合、歯止めが利かなくなる。外から冷静に見て、止めに入る者がいなければ、被害者が帰らぬ人になることも珍しくない。さて、どうなるか、と冬夜が見つめていると影が動いた。一斉にだった。

「死ぬかもな」

隣に夕夏がいることを考えると軽率な発言だったと言える。しかし、笑わなかっただけマシだと冬夜は言えた。今にも腹を抱えて、転げ回りたかったが、それは辛うじて堪えた。

「……っ、悠長なことを言ってる場合じゃないよ！？」

夕夏は堤防を下りていこうとする。それを冬夜は止めた。無造作に腕を掴んで、ぐいと引き寄せる。

「馬鹿か、お前。輪姦（まわ）されてえのか？」

びくりと夕夏の肩が震えた。

「で、でも！」

それでも冬夜の手を振り解こうと、夕夏は腕を振る。しかし、冬夜は更に力を込める。

「な……兄ちゃん、痛い！」

「言っても分からんのなら、痛めつけるしかないだろ」

さらりと冬夜は言った。それを見て、夕夏はぞっとした。兄の顔があんな醜く歪むのを初めて見たのだ。

「まぁお仕置きは、これぐらいで」

冬夜は手を離し、夕夏はバランスを崩して尻餅をついた。しかし、そちらを一瞥することもなく、冬夜は河川敷に向けて一歩踏み出した。

「そこで見てろ。何かあったら大声を出せ」

「は？　ちょっと、兄ちゃん？」
夕夏の呼びかけを無視し、くるぶしほどまで生えた草を踏んでゆく。しかし、僅かな音しか立てず、冬夜はそっと男たちに近づいた。上村のリンチに夢中になっているのか、男たちは冬夜の接近に近づかない。悪魔のような笑みを浮かべた――否、本物の悪魔が音もなく近づいていることに気づかない。
まずは一人、後頭部に蹴りを叩き込んだ。しかし、一撃で仕止めきれなかった。男はよろめきながらも、倒れることはなかったのだ。やっぱり何かがおかしい、と冬夜は訝りながらも続けて拳を振るう。男は体勢を崩していたため、受けることもでなかった。冬夜の拳を受けて、無様に伏す。しかし、まだ動きがあった。しぶといな、と冬夜はポケットに忍ばせたハサミに思いを馳せる。やっちまうか、と思ったところで、他の二人が冬夜に気づいた。
「何だ、てめえ」
低く威圧するような声に、冬夜はわざとらしく肩を竦める。
「そいつ、俺の獲物なんだよね。勝手に殺されたら困るんだよね」
上村を指さしながら、冬夜は言った。男たちは一瞬黙ったが、すぐに「何を言ってんだ」と吠えた。
同時に二人、無理だな――武器なしでは。冬夜は今度こそ迷わずに両手をポケットに突っ込んだ。そしてハサミを取り出す。しかし、右手に見える刃は一つだけだった。そして対の手にはもう一つの刃が握られていた。
そして男たちと交錯し、両手を振るう。それは淀みのない綺麗な動きで、手にしたハサミが銀色の一閃となった。右手で一人、左手でもう一人を斬った。
冬夜に躊躇いはなかった。世界の仮説も、夕夏や上村が見ていることも、そして再び殺人の罪で追われることも全て眼中に無かった。ただ渋い顔で、やっぱりおかしいと呟き、首を傾げた。やがて「ハサミではこの程度か」と、冬夜はため息を漏らす。
「今ので手首落とす予定だったんだけどな」

男たちは唖然と冬夜を見つめ、やがて自らの手首に目をやった。僅かな街頭に照らされて見えるのは、ぱっくりと開いた赤い口だった。やがて、そこからじわりじわりと血が流れ出す。男たちは手首を押さえたまま、冬夜を見つめた。男たちの額から、どっと汗が噴き出し、瞳には畏怖の色が浮かんでいた。

「さすがに骨は断てないか。それなら最初から動脈を狙ったんだけどな」

もし狙われていたら、と思うと男たちはぞっとした。本物の恐怖とは、こういうものなのか、と痛感する。そして今更ながら自分たちの行動を後悔した。

「なぁ、まだやるか？」

刃を空に放り投げながら、冬夜は尋ねた。刃は回転しながら落ちてきて、再び冬夜の手に収まる。刃は街灯の光を鈍く反射していた。まだ血が僅かに残っている刃を弄びながら、冬夜は男たちに迫った。冬夜の態度は、ファミリーレストランで注文の確認をする店員のような薄っぺらい笑顔を持ち合わせながらも、拭いきれない恐怖があった。

しばらくの沈黙。やがて、男たちは冬夜を警戒することなく、背を向けて走り去っていった。あんまり派手に動くと出血が酷くなるのに、と小さく呟きながら、冬夜はその後ろ姿を見送った。

やがて、音もなく振り返る。上村は街灯の下で唖然と冬夜を見つめていた。そして冬夜は微笑む。ハサミの取っ手のところに指を引っかけて、刃を勢いよく回した。

「さて――」

「兄ちゃん、祐介さん！」

どうやって苦しめてから殺そうか、と恍惚の表情で考えていたところを、夕夏の声で現実に引き戻された。軽く舌打ちを漏らし、冬夜は振り返る。草を盛大に踏みならしながら、夕夏が堤防を駆け下りてくるところだった。

「今は何も言うな」

夕夏に聞こえないよう、冬夜は小さく告げた。その際に見せた冬夜の眼光は鋭く冷たかった。その視線に射竦められて、上村は静かにうなづいた。

＊

翌日。暇を潰すために、冬夜は再び学校を訪れた。しかし、登校と同時に職員室に呼ばれ、昨日の教師と上村に対する暴行の叱責を受けた。それで結局、一時間が潰れて、二時間目から授業に参加することになった。しかし、退屈な時間が過ぎるばかりで、冬夜は寝て過ごすしかなかった。

やがて、昼休みになり、冬夜は一人で弁当をつつく。四月前半の不登校から復帰したものの、クラスメイトの大半が冬夜の変貌に困惑していた。どう接するべきか悩んでいるようで、時折向けられる視線に、冬夜はうんざりとしていた。明日から学校に来るべきかどうかを悩みながら、冬夜は空になった弁当箱を鞄にしまった。

しかし、冬夜にとって予想外の事態が起きる。上村がやってきたのだ。顔は絆創膏やガーゼ、瞼の上は青く腫れ上がっていた。「この程度で済んで良かったな」と冬夜は嫌味っぽく笑いかけた。

上村がやってきた理由は分かる。昨晩のことだろう。冬夜は上村を引き連れて、教室を後にした。階段を上り、音楽室や美術室の並ぶ階を目指した。この時間、特別教室の周辺は人気がないからだ。聞かれたくない話をするには最適だし、殺すにしても邪魔が入りにくい。ただ、こんなところで殺したら目撃者多数ですぐさま犯人確定だろう。しかし、そんな細かいことを気にする繊細さなど冬夜は既に捨てていた。

「説明する義務はないね」

こいつは本当に死にたいのか、と冬夜は半ば苛立ちながら、上村に言った。今は夕夏というストッパーがいない。今なら簡単に殺せるだろう。しかし、あまりにも軽率な行動ばかり取る上村を哀れに

思うのも、また事実だった。自分が殺すまでもなく、勝手にどこかで死ぬんじゃないかと思えたのだ。
「確かに義務はない。けど、何であんなこと――」
「だから、それに答える義務も無いだろ」
流石に二回目になると、冬夜の語気が強まった。冬夜はポケットに入っている二本の刃に手を伸ばす。刃同士が触れ合い、音が鳴った。それだけで上村は理解したようで、一歩下がった。結構です、と言わんばかりに首を横に振りながら。
「でも、部活を辞める理由って――」
「関係ねえよ」
完全に無いとは言い切れない。ただ、上村は納得がいかないと言った様子だった。まるで捨てられた子犬のような目をして、冬夜を見てくる。「ああ、面倒くさい」と冬夜は頭を掻いて、乱雑に言う。
「お前が気に入らんから、部活は辞めたんだ」
突き放す一言としては充分だったはずだ。しかし、上村は引かない。少し悲しそうに目を伏せた後に顔を上げた。それは、どこか決意の見える顔つきで、冬夜は思わず身構えた。
「夕夏と付き合い始めたからか？　だったら今は別れる。お前が納得してくれるまで待つから」
俺にとってはお前も夕夏等しく大切なんだ、と上村は冬夜に迫る。冬夜が刃を持っているのも気にせず――否、気にする余裕がなかったのだろう。それは冬夜も理解できた。何て必死な顔で、すがりついてくるんだよ、と冬夜は顔を引きつらせた。
「離れろ、殺すぞ」
上村ははっとして、一瞬で冬夜から離れた。顔色は青い。そんな上村を見て、冬夜は苦い表情で首を横に振った。
「お前にだけは絶対に教えねえ」
そう一言残して、冬夜は上村に背を向けた。
お前がそんなだから――良いヤツすぎたから、俺が狂うしかなかったってのに。良心と嫉妬の狭間で、どれほど俺が苦しんだかも知

らずに。
冬夜は一度も振り返ることなく、教室へと戻っていった。残された上村は、ただ悲しそうに冬夜の背中を見送った。

表と裏

不本意ながらも、冬夜が上村を助けてしまった日から三日も経った。走馬灯にやってきてから、三日でもある。

昨日、冬夜は学校をサボってみた。ベッドで横になっていると、時計の針が一秒一秒を正確に刻む音が、静かな部屋でずっと続いた。冬夜は動かない。呼吸の音すら立てず、静寂の一部と化す。もはや心臓すら止まっていて、目を開けたまま死んでいるのではないかと思えるぐらいに、冬夜は不動だった。

やがて、その静寂を破って、冬夜は身を起こす。

「腹、減ったな」

面倒くさそうに後頭部を掻いてから、冬夜はリビングに向かった。

仮説その一、この世界は走馬灯だ。仮説その二、殺人を繰り広げた世界が夢だった。この二つの仮説は、冬夜の中で徐々に溶けて、形を留めないどころか、排水口に流れ込みつつある。それを気にする様子もなく、冬夜は朝昼兼用の食事を平らげた。相変わらず嗅覚と味覚が良い仕事をしている、と冬夜は満足げに息を吐いた。

仮説がどうでも良くなりつつあったのは、この世界の自由度のせいだろう。どの仮説だろうと関係ない。自分が考えて、それがベストだと思う選択、行動を取っていけばいい、と考えたのだ。その結果、人が死ぬかもしれないし、死なないかもしれない。ただ、冬夜からすれば、どうでもいい話だった。たとえ、時を遡って、人生をやり直すチャンスを掴んだところで、真面目にやり直すつもりなど、さらさら無かった――と言うよりも、やり直すと言う選択肢が、元より冬夜の中に無かった。

暇だ、と小さく呟いて、冬夜は背伸びする。背骨が小気味の良い音を奏でた。そして自室に戻って、再び布団に潜り込んだ。そして食後の満腹感から訪れる眠気に身を委ね、重くなってゆく瞼を下ろした。結局、三日目は食っちゃ寝を繰り返しただけだった。そして

三日が経ったのであった。
四日目に入ったばかりの頃、冬夜は目を覚ます。暗闇の中、ぱっちりと開いた両眼が怪しく光った。そろりと音を立てないように布団を抜ける。途端に冷気が服の隙間から忍び込み、布団の温もりが恋しくなった。それを振り切って、冬夜は冷たい服に袖を通していった。下は動きやすいジャージに、上は風を通さないナイロン生地の黒いパーカーを羽織る。首筋に引っかかったフードが冷たく、冬夜はそれを慌てて払った。
家の鍵と二本の刃をポケットに忍ばせて、そっと廊下に出た。既に家族は寝ているのか、音はない。靴下をはいた足でフローリングを滑るように進み、階段も無音で下りていった。
一階に下りると、冬夜の予想通り、リビングに明かりは無かった。それを見て、少しだけ安心しながら、冬夜は玄関に向かう。二つの鍵を音もなく開け、そっと扉を押した。重厚な扉が僅かに鳴く。それでも寝ているなら気づかれることもあるまい――冬夜は身を滑らせて表に出た。鍵を閉めて、大きく息を吐く。家を抜け出るだけで一苦労だった。
空気は冷たく、澄んでいる。見上げると、空に浮かぶ星は鮮明に映った。何をするにしても、人は一日一回は空を見上げるのではなかろうか。空には不思議な魅力がある。綺麗な星空なら、それに見惚れる。またどんよりと曇った夜空なら、どこか不気味な印象を受けるだろう。晴れは見ていて爽快だし、昼間の曇りは雨の心配をして、空を眺めてしまう。たとえ、どんな天気であろうとも、人は空に惹きつけられる――そう考えると、自分も俗物になってしまったような気がして、冬夜は不機嫌そうに顔をしかめた。
そして、アスファルトを蹴る。最初はゆっくりとしたペースを心がけて、冬夜は走り出した。
何かしら特別でありたい、と冬夜は思う。日本人は特に目立つのを嫌う。しかし、それは自分が特別で無くてもよい、と言うわけではない。ただ、衆目に晒されて、恥をかくことを極端に嫌っている

だけなのだ。つまり、恥をかかないのならば目立ってもよい。誇れる物があるならば、それを認めてほしいと人は願う。承認欲求は誰もが持つものだ。そう考えると、やはり自分は俗物なのかもしれない――そんな結論にたどり着いて、冬夜は路肩に唾を吐き捨てた。

緩やかな坂を上り、堤防に差し掛かる。河川敷には下りず、そのまま堤防の上を走り続けた。息が荒れる。部活に行かなくなって、二ヶ月ぐらいだろうか。体力が少し落ち始めた頃なのだろう。酸素不足を全身が訴えてくるも、冬夜は足を止めなかった。

上村を助けた時にも感じた違和感の正体を、冬夜は掴みつつあった。圧倒的に体力が不足しているのだ。長い逃亡生活で培われた体力と筋力は馬鹿にできない。基本的には殺人を繰り返す中で培われた筋力なので、純粋に人を殺すための筋力になるのだろう。それが今の身体には一切無かった。

そのため、腕を振るう際もイメージ通りに身体が動かず、毎度苛立った。全ての動きがワンテンポ遅い。今後どんな生活を送ってゆくにしても、これだけは一番最初に解消しておきたい問題だった。

何があるか分からないしね、と早口で漏らしながら、冬夜は両手を振るった。走っている途中で、ただでさえ酸素不足で苦しむ中、更に振るい続ける。

基本的に苦しいことは好きではない。それはどんな人だって同じだろう。しかし、自分の身を自分で守れないと言うのは、冬夜が現在感じている苦しみよりも遙かに大きいことだった。力が無ければ落ち着かない、とでも言うべきか。強迫観念のように、自らの弱さに迫られた結果、夜に家を抜け出してトレーニングに勤しむことを決意したのだ。

短く息を吐いて、右手を放つ。長袖が空気を掻いて、ばさりと派手な音を立てた。まだまだ遅い、と冬夜は息を荒くしながら、左手を振るう。

格闘技に詳しくない者が見れば、シャドーボクシングなんて言葉を思い浮かべただろう。しかし、冬夜の動きはボクシングとはかけ

離れた物だった。武器があることを前提とした一撃必殺。ボクシングのように素早く腕を戻すようなことはしない。一発放って、硬直。緩やかに腕を引きながら、逆の腕をまた放つ。その作業を繰り返した。

やがて腕が上がらなくなってくる。それと同時に足も止まった。冬夜は空を見上げたまま、荒く息を吐いて、空気を貪り食った。今、襲われたら一溜まりもないな、と冬夜は軽く笑った。周囲に人の気配はない。ポケットの中の二本の刃を使う必要は無さそうだ、と少し残念に思いながらも、家に向かって再び走り出す。息は充分に整った。アスファルトをほとんど音もなく蹴り、冬夜は闇に溶けていった。

＊

「兄ちゃん、学校！」

トレーニングを終えて、帰ってきたのは二時。それからシャワーを浴びて、寝たのは三時だった。

そんな事情を知らない夕夏は容赦なく、冬夜の身体を揺らす。昨日は全力で無視したが、今日は無視し続けることができなかった。

「ちょ、痛いから、揺らすなって」

身を捻ると背中の筋肉が悲鳴を上げた。夕夏の手を振り払うと、その腕が痛む。上半身を主に、酷い筋肉痛だった。

「ど、どうしたの、大丈夫？」

「俺のことは気にするな……さっさと行け」

遅刻するぞ、と付け加えても、「兄ちゃんは？」と尋ねられて、じっと瞳をのぞき込まれる。冬夜は目を逸らすことなく、「後から行く」と告げた。もちろん、行く気はない。嘘だ。しかし、それを見透かしたように夕夏は言う。

「嘘ついたら？」

「針千本――」

あの懐かしのセリフを自然と口ずさんで、しまったと冬夜は後悔した。
「分かった。来なかったら、針千本ね」
綺麗なウィンクを決めて、夕夏は部屋を出ていった。本当にやるはずがない、と思いながらも、冬夜は身を起こし、掛け布団から抜け出た。そしてノロノロと支度を始める。どうせ遅刻は免れないのなら、精一杯ゆっくりとしていこう。ささやかかつ幼稚な反抗をしながらも、着実に準備は進んでいくのであった。
リビングに下り、母の用意した朝食を平らげ、弁当を手に家を出る。まだ八時半頃だったので、学生服を時折見かけた。ただ、冬夜と同じの遅刻組であることは間違いなかった。
ペダルを踏むも、背筋が痛み、両足の重みも酷い。学校に向かうだけで、何故これほどの苦行に陥っているのか、と本気で悩みながらも、冬夜はペダルを回した。
程なくして学校に着く。一昨日、冬夜が学校をサボった日に降った雨で、桜の花びらは散っていた。散らばる花びらは数々の人に踏まれ、黒ずんで汚らしかった。咲いている時は、あれほど綺麗だったのに。不思議なものだ、と小さく呟いて、冬夜は職員室へと向かった。
遅刻届けを書きながら、冬夜は考える。桜が綺麗に咲き誇っている時よりも、散った後の汚れた花びらの方が目を引いた。自分はつくづく壊す側の人なのだな、と改めて思う。創造と破壊は表裏一体なんて言葉を冬夜は聞いたことがあった。しかし、表と裏は絶対的に違う。表と裏と言う関係で繋がっているだけで、それらが顔を合わせ、意気投合するなんてことは絶対にあり得ない。一セットであっても、永遠に対となり、混ざり合わないのが、表と裏の関係なのだ。
この手で何かを作り上げることなんて、一生できないことなのかもしれない――ボールペンを握った手を見つめながら、冬夜は小さくため息をついた。そして、遅刻理由の欄で止まっていた手を再び

動かした。
　それを記入して、冬夜は教室へ向かった。階段を上る際に、全身の筋肉が悲鳴を上げる。今すぐに保健室に駆け込みたい衝動に刈られるも、何とか堪えた。ようやく階段を上りきり、誰もいない廊下をふらふらと歩く。そして大きく息を吐きながら、教室の扉を開いた。
「遅れて、すみません」と冬夜はこれ以上は無いと思える棒読み具合で、遅刻届けを教師に差し出した。今回は気の弱そうな教師で、曖昧な笑みを浮かべながら、冬夜の遅刻届けを受け取った。
　冬夜は席について、教科書を机の隅に置く。本当に申し訳程度の行為で、授業を真面目に受けるつもりなど、さらさらなかった。両腕で枕を作り、そこに顔を埋める。今日は一日休む、そう心に誓って、再び眠りについた。
　しかし、眠りが浅い上に、野暮な教師は冬夜を起こしにやってくる。その都度、教師を睨みつけ、追い払う。以前のボールペン効果が出ているようで、ほとんどの教師が逃げるように去っていった。
　そして退屈な時間が過ぎ、ようやく昼休みになる。弁当をさっと平らげて、再び休眠モードに入った。冬夜は、できるだけ身体の回復作業に努めたかった。
　やがて、昼の授業も終わり、放課後になった。それでも目覚めない冬夜の前に、一人の少女が現れた。彼女は人差し指で冬夜の腕を突いた。反応は無い。くすり、と笑みを漏らして、今度は少し強めに突いてみる。それでも冬夜は動かない。もう少し強めに、と彼女が指を動かしたところで気づく。僅かに頭が上がっていることに。腕と顔の間に僅かな隙間があり、そこに見える冬夜の瞳は剣呑な光をきざしていた。
「お、おはよ」
　それに気圧されるように、彼女の声が震えた。冬夜はそれを黙殺して、再び顔を腕の中に沈める。
「あ、ちょっと」

今度は指ではなく、両手で冬夜の肩を揺さぶった。冬夜は反射的に両手を払い、顔を上げた。
「何だよ」
「もう放課後だけど」
にこりと少女は微笑む。なるほど、と冬夜は席を立った。
「起こしてくれて、ありがとう」
先ほどまで寝ていたとは思えない切り替えの早さで、冬夜は教室を出ようとする。それを少女は遮った。冬夜の前に立ち、出口を塞ぐ形で。
「遅れてきて、ずーっと寝てたけど、南雲くんは学校楽しい？」
「全く」
少女を押し退けて、強引に帰ろうとするも、少女は冬夜の腕をしっかり掴んでいた。
「……何」
「ん」
冬夜の問いかけに、少女は行動で示す。冬夜の目の前に差し出されたのはアンケート用紙のような物だった。
「文化祭の出し物、同票で決まってないの」
うちのクラスは奇数人数なのに、と少女は微笑む。
「俺か」
「そう、南雲くん」
「お前が入れた方にしといてくれ」
文化祭なんて顔を出すつもりもなかった冬夜は、再び強引に突破を試みる。しかし、少女は粘り強く、冬夜は苛立ち始めた。
「それじゃあ私の独断で決めることになっちゃうし」
委員長の私にそんなことできません、と困ったように少女は言う。この小さい女、委員長だったのか、と冬夜は顔に出すことなく、驚いた。冬夜より頭一つ分ほど背の低い少女は、ぱっちりとした二重の目で冬夜を見上げていた。
「選択肢」と冬夜は言った。しかし、その意味を飲み込めなかった

のか、少女は目を丸くして首を傾げた。
「え？」
「だから、同票になった選択肢を教えてもらえないと、投票できないだろ」
あ、そっか、と少女は慌てて別の紙を取り出す。それを見て、冬夜は眉をひそめた。
「恋愛とお笑い？」
「うん、演劇することになったんだけど、どっちがいいかな、って」
演劇、と冬夜は小さく漏らす。元々は不登校になり、文化祭にも顔を出さなかった。これまた面倒くさいことになりそうだな、と冬夜は頭を掻いた。
「どっちでもいいよ、本当に勝手に決めといてくれって」
「えー、ノリ悪いなぁ」
少女は口を尖らせた。それを無視して、冬夜は横を通り過ぎようとする。
「あ、ちょっと待ってって！」
慌てて冬夜の横に並ぶ少女。後ろで一つに束ねた髪が揺れた。そんな少女を突き放すために、冬夜は言う。
「文化祭とか参加するつもりないし」
「え、サボる気なの？」
当然と言わんばかりに、冬夜はうなづく。しかし、それで引き下がってくれる気配は無かった。
「皆でやらないと意味ないよ」
少女の言葉に、冬夜はぴたりと足を止めた。その瞳は再び剣呑な光を宿す。衝動に任せて口を開こうとするも、寸前で堪えた。言葉を飲み込み、代わりに大きく息を吐く。冬夜の気分は、少し落ち着いた。
俺がいなくても文化祭やったくせに――飲み込んだ言葉を反芻する。冬夜が不登校だった頃は、彼一人の不参加で文化祭の出し物を自粛したなんて話を聞いた覚えはない。つまり、冬夜を欠いたまま、

このクラスは何かしらの出し物を行ったはずなのだ。それなのに今更だ。冬夜の噛み締めた奥歯が悲鳴を上げた。
「本当に勝手にしてくれ。あとは俺を巻き込まないでくれ」
「……何だか、不貞腐れてる？」
下駄箱を前にして、冬夜の足が止まった。少女を睨みつけながらも、吐き出す息を堪える。膨張した感情を少しずつ抜くように、冬夜は小さく息を吐いていった。
「別に」
苛立ってるだけだ、と最後に付け加えて、下駄箱へと向かう。自らの靴が入っているところへ手を伸ばす。そこで再び少女が割り込み、前を遮った。
「そんなイライラしてて楽しい？」
「楽しくないから、サボるんだ」
少女を押しのけて、靴を履き替える。そして、そのまま駐輪場に向かった。
そこまで少女はついてこなかった。一瞬だけ下駄箱の方を振り返ってみると、そこに少女の姿は無かった。恐らく、諦めて戻ったのだろう。冬夜は小さくため息をついて、自転車に跨った。

＊

午後二十時。冬夜は腕時計を見つめていた。
町は明るい。まだ営業中の店の看板が煌々と輝いている。赤や黄と夜の闇に呑まれない光が、冬夜の瞳を染める。それを見ているだけで、冬夜は落ち着いた。心の芯まで溶けてゆくかのような安心感と、言い知れぬ高揚と矛盾した感情が渦巻き、混ざり合ってゆく。しかし、心は静まらなかった。
ポケットに突っ込んでいた右手を抜く。何度か握ってみて、筋肉痛がマシになっているのを確認すると、冬夜は静かにうなづいた。口角が僅かに上がる。

黒いパーカーに黒に近いジーンズと今日も闇に溶け込むような服装だった。とは言え、この通りはネオンの光が派手で、冬夜の姿を隠しきれるほど闇は濃くない。それを気にすることなく、ゆっくりと通りを歩いた。スーツに身を包んだ中年、男女のカップル、馬鹿騒ぎしながら過ぎてゆく男の集団など、通りは未だ活気に満ちていた。これなら必死に探さずとも、すぐに見つかるかもしれない――うつむいていた冬夜の顔が恍惚で満ちてゆく。

雑踏に混じり、冬夜は目だけを動かす。何か無いか、と血走った眼で。その様子に気づく者がいれば、まるで薬物中毒者を連想しただろう。しかし、冬夜の動きは小さく、うつむき加減のため、ほとんどの人が気づかなかった。雑踏は炸裂寸前の爆弾に気づくことなく、過ぎてゆく。

やがて、冬夜は足を止める。彼の耳に僅かな音が届いたのだ。流れを急に止め、幾人かが冬夜を睨み、避けて過ぎて行った。それを気に留めることなく、流れに逆らうように足を進める。そして細い路地に踏み込んだ。

すえた臭いと湿気がこもった臭いが鼻をつくも、冬夜の頬は自然と緩んだ。ここが俺の世界だ、と小さく呟き、迷うことなく奥へと進む。雑踏とは違う不自然な音を捉えた。大通りで客を呼ぶような声ではない。低く怒鳴るような声だった。それに惹かれるように、冬夜は路地へと踏み込んだのであった。

大通りの雑踏が遠ざかり、怒声はよりはっきりと聞き取ることができた。それにうなづきながら、冬夜は嬉々として足を運ぶ。いつしか早足になっていることにも冬夜は気づかず、音に誘われるがままに足を動かし続けた。幾度か角を曲がり、雑踏は遠くに消えつつあった。

やがて、冬夜は現場にたどり着いた。身を隠して、観察するようなことはしない。堂々と、その場に踏み込んだ。三人の男が一人の女性に迫っていた。こんなことがあるんだな、と冬夜は呆れ半分、期待半分で音も無く地を蹴った。

「……あ？」
それに一人が気づき、声を上げた。しかし、時既に遅し。冬夜は既に距離を詰め、振り向きざまの男に容赦なく蹴りを叩き込んだ。蹴り足は顎に入り、男の頭は不自然に揺れた。そして、受身を取ることなく地に伏せた。頭を中心に血が広がる。恐らく、鼻を打ったのだろう。まだ身体が言うことを利かないのか、男はアスファルトの上でもぞもぞと動いていた。
「な……何だ、てめえ！」
もう二人がようやく気づき、冬夜に吠える。しかし、吠える間があったら攻撃しろよ、と冬夜は呆れた。広がってゆく血を蹴り、もう一人に迫る。驚愕で目を大きく見開いた男は、なす術も無く、冬夜に殴られた。
軽い――拳に伝わる感触に、冬夜は不機嫌そうに眉をひそめた。男はぐらりと体勢を崩しかけながらも、倒れることはなかった。まずい、と距離を取ろうと地を蹴るも、二人目の男の襲撃を躱すには少し遅かった。しかし、モーションが大きい男の拳を避けるのは容易い。それを片手で綺麗に受け流して、カウンターで一撃放り込む。続けざまに蹴りを腹部に叩き込んで、二人目は苦しそうに崩れていった。
「く、そ」
残った一人が唇から流れる血を拭い、ポケットに手を突っ込んだ。冬夜はそれを黙って見つめる。その瞳はもはや濁った色で満たされていた。出てきたのは刃渡り十センチもない上に折りたたみのナイフだった。冬夜は失望したかのように肩を落す。
「おもちゃかよ」と漏らす冬夜自身の装備も、そう優れた物ではない。それでも男の持つ小さなナイフに比べれば、幾分かマシな自信があった。
でも、まぁ、と冬夜は微笑む。
「お前が先に抜いたんだからな」
両のポケットに手を突っ込み、刃を引き抜く。それをくるくると

回しながら、冬夜は男に迫る。並べてきた言葉とは裏腹に、狂喜に満ちた笑みで。

「さぁ、遊ぼうか」

雲は月の明かりを遮り、大通りの華々しいネオンの光も届かない。闇夜に銀の閃光が走った。カビとすえた臭いの充満する汚れた世界に、もう一つ臭いが混ざる。そこでようやく、冬夜は故郷に帰ってきたかのような心地に包まれ、心が静まった。

三人の男がひれ伏す光景を冬夜は見下ろした。ここが俺の世界だ、と残された女性を気にすることなく笑った。その声が大通りに届くことはなかった。

日常、時々、異常

来るんじゃなかった――冬夜は後悔しながら、大きくため息をついた。原因は目の前の少女にある。

「ほら、南雲くん、こっちこっち！」

少女は冬夜に手を振っていた。そんな手を振るような距離ではないし、目立つから止めろ、と叫びたいものの、叫ぶという行為の方が更に目立つため、冬夜は言葉を飲み込んだ。最近、言いたいことが言えていないような気がする――そう小さく呟いた。

冬夜は不機嫌そうに眉をひそめながらも、ようやく少女に追いついた。文句の一つぐらいは言ってやろうか、と口を開こうとしたところで、先手を打たれた。

「ここでいいよ、ありがとね」

少女は微笑んだ。冬夜は指示通り、運んできたダンボールを置いた。さっさと帰ろうと、冬夜は教室を出たところで、少女に捕まり、荷物運びをさせられたのだ。無視して、強引に振り切っても良かった。しかし、また下駄箱までついてこられるのも面倒くさい、と考え、一度だけ付き合ったのだ。

「もう、これ以上は手伝わねえぞ」

「うん、もういいよ。本当にありがとね、助かった」

少女の笑みは止まない。冬夜はそれを見て、何かしら嫌な予感を覚えた。何か裏がある、と確信し、その場を去ろうとした時には遅かった。少女にがっちりと腕を掴まれ、冬夜の頬が引きつった。

「これからさ、演劇の練習するから見ていってよ」

「遠慮しとくぜ」

「遠慮なんていらないから」と少女は半ば強引に冬夜を引きずってゆく。本気で抵抗しなかったとは言え、あの小さな身体のどこにこんな力があるのか、冬夜は不思議でならなかった。演技をほとんど見ずに、人体の不思議についてぼんやりと考えてしまった。

「ねぇ、どうだった？」
尋ねられたことを理解するも、ほとんど見ていなかった冬夜は曖昧にうなづく。僅かに残る記憶を総動員するも、素晴らしいとはお世辞でも言えない出来だった。しかし、高校生が文化祭で行う演劇にしてみれば、充分以上の熱意があったのではないか、と思い、素直に「凄いんじゃないか」と零した。よくぞ、ここまでクラスメイトを引っ張ることができたな、と言う意味で。
「本当？」
冬夜は黙って、うなづく。少女はしばらく冬夜の顔を覗き込んだ後、「そっか」と零して微笑んだ。
「今の言葉に嘘はなさそう」
「おい、待て。一体どういう判断したんだ」
思わず冬夜は突っ込む。大体、この少女に対して一度たりとも嘘をついたことはない。ただ、そこに嘘をつきたくなかった、と人らしい感情はない。嘘をつく必要性や機会が無かっただけだ。必要があれば、嘘をついただろう。それこそ、さらりと息でもするように。
それに対し、少女は微笑みながら「分かるんだ」と言う。
「南雲くんの言葉が、演劇のクオリティに対する感想じゃないことぐらいは分かっちゃうんだ」
少し苦い笑みを浮かべた少女に、冬夜は眉をひそめた。何を根拠に、と冬夜は尋ねる。しかし、少女は何となく、と答えるだけだった。
やがて、冬夜は興味を無くしたのか、無言で教室を出た。クラスメイトの視線を背中に感じながらも、賑わった廊下を歩いてゆく。どのクラスも文化祭の準備を進めていた。
「ち、ちょっと待ってよ！」
いつものように少女に腕を引かれて、冬夜は顔をしかめる。登校拒否を真剣に検討したい、と冬夜は小さくため息をついた。
「まだ何かあるのかよ」
不機嫌そうな冬夜を、少女は戸惑いと悲しみの色が混ざり合った

瞳で見つめた。
「本当に文化祭、来ないの？」
「多分」
「なら来るかもしれないんだね？」
多分の意味を分かって言っているなら大したもんだ――冬夜は皮肉ではなく、純粋に思う。
「前も訊いたけどさ、本当に楽しくないの？」
冬夜は一瞬だけ考えて、静かにうなづく。そこに嘘は無いはずだ。その返事を聞いて、少女は悲しそうに目を伏せる。
「嘘じゃないんだね」
「むしろ、何で楽しめるんだ？」
冬夜は純粋に尋ねる。嫌味ではなかった。むしろ、そこから得た答えで何か変わるかもしれないと思いつつも、期待外れの答えに身構えた。期待という行為にはリスクが伴う。期待すればするほど、それを裏切られた時の反動が大きくなる。だから、冬夜は期待を打ち消すように、頭の芯を冷やし、少女の返事を待った。しかし、彼女は困ったようにうつむき、腕を組んだ。
やはり、少女にとっても大した理由ではないのかもしれない――そう解釈した冬夜は、そっとため息をついて、少女に背を向けようとした。
「何が楽しくないの？」
質問に質問を返すなよ、と思いながらも、冬夜は返答を考える。
「全体的に楽しくないから、何が楽しいのか、何で楽しめているのか尋ねたんだが」
「友達と喋るのも楽しいかな。あ、もちろん、勉強はあんまり楽しくないけど」
少女は照れたように舌を覗かせた。
「私は体育も好きかなぁ。結構、嫌う人も多いけどさ、身体を動かせるって結構すっきりしない？」
すっきりするものか、と冬夜は返しそうになったのを堪える。い

つまで経ってもイメージ通りの動きに到達できない冬夜は、苛立ちを覚えるばかりだった。とは言え、トレーニングを開始して、まだ一週間と経っていない。結果が出ないのも当然だと、冬夜は理解していた。
「そう言えば部活も辞めちゃったんだっけ？」
冬夜は答えない。
「何で辞めたの？」
「別に、理由なんてない」
「嘘」
あまりに早い宣言に、冬夜は思わず顔を上げた。その顔は明らかに苛立ちの色が浮かんでいた。
「確かに嘘だ。それが何か？」
「……うわぁ、開き直ったし」
それでも少女は楽しそうに笑った。冬夜にはよく分からなかった。
「とりあえずさ、手伝えとは言わないよ。だから、毎日学校には来てほしいな。南雲くん、明日から学校来ないつもりだったでしょ？」
私、しつこいもんね、と少女は苦笑を漏らす。冬夜はうなづいてやりたかったが、寸前で堪えた。
「演劇の感想が欲しいの。私たちは皆、製作に携わってるから、外からの冷静な意見が欲しいんだ」
「で、放課後の自由な時間をどれぐらい束縛してくれるんだ？　結果、俺が何か得をするのか？」
手伝うまいと、冬夜は早口でまくし立てた。少女は困ったように肩を竦める。
「さぁ、私には分からないよ。それは南雲くんが見つけるべきだと思う」
「俺が？」
そう、と少女は柔らかに微笑む。
「楽しくないってのはね、きっと南雲くんの思い込み。それがきっと目を曇らせているんだよ。だから、その思い込みを無くすことが

一番」
色んな場面に自分を置いて、そこで楽しみを見出す努力をしてほしいの――少女はそう言って締めくくる。いつしか、二人は下駄箱までやってきていた。
「じゃあね、南雲くん」
また明日、と少女は小さく手を振る。冬夜は振り返ることもなく、「気が向いたらな」と返して、去っていった。
自転車置き場までやってきて、視線が無くなった。そこで冬夜は一度だけ校舎の方を振り返る。表情は無かった。ただ、冬夜の口が僅かに動く。ここは俺の世界じゃない、と自分に言い聞かせるように何度も唱えてから、やがて校舎に背を向けて自転車に跨った。
その晩、冬夜が夜の街に出ることはなかった。自宅でトレーニングを済ませて、日付が変わる頃にはベッドで眠りに落ちた。

＊

翌日、冬夜は学校に行った。一日授業を終えてると、少女に捕まらないように学校を去った。そして行ったり行かなかったりと、本当に気分で一週間を過ごす。逃げることに失敗し、少女に捕まることもあった。その度に席に座らされ、クラスメイトのやる演劇を眺めることになった。
そして文化祭の前日になる。冬夜は明日、学校を休むことを少女に告げようとやってきたのに、今日も演劇を最後まで見るハメになった。つくづく恐ろしい女だ、と冬夜は頬杖をつきながら、演劇を一通り眺める。劇的な変化はない。ただ、熱意のようなものは以前に増して感じらた。
「どう、かな？」
全てが終わって、少女が尋ねる。冬夜は「良くなった」と当たり障りのない返事をした。それ以外に何と言えばいいのだ、と冬夜は内心で叫ぶ。クラスメイト全員にじっと見つめられて、感想を求め

られる側の気持ちも考えろ、と少女を睨み付けた。少女は苦笑で応じた。
「じゃあ、帰っていいよな」
冬夜は席を立ち、教室を後にする。何とも言えない気まずい雰囲気から逃げるように、冬夜は早足になった。
「ちょっと待ってよ！」
いつものように追いかけてくる少女に、冬夜は足を止めて振り返った。呆れたように息を吐き、少女が追いつくのを待つ。
「……ごめん、何も考えてなかった」
少女は頬を赤く染めながら言った。
「あの場じゃ、良かったって言うしか無かったよね」
気を遣わせてごめん、と少女は頭を下げた。
「別に」
冬夜は感情のこもってない声で返し、再び足を進めた。少女に頭を下げさせている光景が無駄に視線を集めるので、それから逃げるように冬夜は足を進めようとした。それに気づいて、少女は慌てて冬夜に並ぶ。
「で、本当のところ、どうだった？」
「一週間で、あそこまで変わるんだな、と正直驚いている」
冬夜は素直に感想を述べた。
「でしょでしょ！　感情のこもった演技ができてるでしょ」
少女は嬉しそうに言った。しかし、そこで冬夜は首を傾げる。感情という言葉が妙に引っかかった。
「悪いが、それは分からなかった」
皆、真剣に演技をしているから、その熱意だけは分かった、と冬夜は続けて述べた。
「えー、感情、届いてないのかなぁ」
少女は肩を落として、がっくりとうな垂れた。それを見て、冬夜は口を開く。
「いや、観客が悪かったんだろ。原因は恐らく俺にある」

そうか、感情か。冬夜は内心で苦笑を漏らした。
「あ、何か良くないこと考えてる」
「……何故分かるんだ、お前」
「前も言ったけど、何となくなんだよ」
それより、と少女は区切って眉をひそめる。
「お前って呼ぶのい加減やめてほしいなぁ」
そう言われて、冬夜の目が泳ぐ。少女の頭から靴の先まで、さっと見た。
「まさか、と思うんだけどさ」
少女は頬を引きつらせながら、続けて言う。
「もしかして私の名前、覚えてないの？」
結局、外見から名前の情報を探し出すことはできなかった。冬夜は負けを認めるように、視線を逸らす。
「マジですかい」
「ほとんど不登校だったからな」
苦し紛れの言い訳をするも、ここまでに何度か学校を訪れている。その間に覚えるチャンスだってあったはずだ。しかし、億劫だと、冬夜は調べることもしなかった。その後ろめたさが顔に出たのか、少女は不機嫌そうに眉をひそめた。
「西浦　かなみ！　それが私の名前です、ちゃんと覚えてよね？」
「了解、西浦さんだな」
冬夜は、あまり覚えるつもりもなかった。しかし、その名前はすとんと胸に落ちていった。何度も帰り際に捕まった印象が強すぎて、むしろ覚えないという行為の方が難しくなっていたのだ。
「ねぇ、私以外のクラスメイトの名前、覚えてる？」
それに冬夜はワザとらしく肩を竦める。言うまでもないだろう、と言わんばかりだった。それに少女は再び肩を落とす。
「もう五月だよ」
「さっきも言ったが、四月の半分以上は休んでいただろうに」
階段をゆっくりと下りながら、冬夜は言い返した。

「で、だ。一応、話を戻すぜ。感情云々ははっきり言おう。俺の欠陥だ」
「欠陥、って……もっと別の言い方無いかなぁ？」
西浦は苦笑で言うも、それ以上に相応しい言葉は――と考えて、冬夜は適切な言葉が思い浮かんだ。
「壊れた」
「え？」
「俺は恐らく壊れてるんだ」
冬夜は、そんなことを無表情で言う。西浦はしばらくきょとんとしていた。そんな彼女の反応を見て、冬夜は少し後悔した。言ったところで、きっと分からないのだろう。それなら言わなければよかった。自らの欠陥を晒して、俺は何がしたいんだ、と冬夜は自身に腹を立てた。
感情――それらは冬夜にとって邪魔な物でしかなかった。感情があるせいで頭が腐りそうになるほど悩み、結果的に狂気を抑えきることができなくなった。
恐らく、あれから冬夜は感情を殺し続けてきたのだろう。どれほど殺しても、傷つけても、踏みにじっても、蹴散らしても、冬夜の感情は揺れない。もはや、感情の殺し屋と呼んでも間違いないだろう。そして、それは逃亡生活の中で罪悪感に押しつぶされないように、更に成長を続けた。いつしか、どんな状況であろうとも、無意識に感情を押し殺すことができるようになっていたのだ。だから、冬夜自身もどんな感情が渦巻いているのかも知らずに、いつの間にか綺麗さっぱり処分されていた。
決定的な欠陥を目の当たりにして、冬夜は静かにうつむいた。瞳が陰り、濁る。自分の世界は暗く、臭い路地裏でなかったか、と自問自答する。こちらは自分の世界ではないのだ、と割り切って、冬夜は止まっていた足を再び進めだした。
その時だった。
「なら直そうよ」

「は？」
踏み出そうとしたところで足を止め、冬夜は即座に振り返った。
「壊れてるんなら直す努力しようよ」
「決定的だぜ？」
「粉々？」
そこで冬夜は返答に困る。一体どう言えば、西浦は納得するだろうか。冬夜は逡巡する。
「ん、大丈夫、絶対直るって」
悩んでいる冬夜を余所に、西浦は微笑んだ。その根拠は一体どこから、と言いそうになるも、冬夜は言葉を飲み込んだ。その代わりに吹き出す。失笑と苦笑の混じったもので、冬夜はそれを噛み殺すことができなかった。それぐらい気楽に考えられたら、自分も狂うこともなかったのだろうか。その思いが胸に僅かな痛みをもたらした。
「な、何よ」
少女の頬は僅かに赤い。
「お気楽でいいよな、って」
「考えすぎるより、マシでしょ」
ポジティブがいいんだよ、と西浦は言うも、不機嫌そうに顔を背けてしまった。
でも、まぁ、と西浦は冬夜を見つめ、口を開く。
「笑えるんだったら、大丈夫だと思うよ」
やんわりと西浦は微笑む。大丈夫――その言葉が冬夜の心の中に落ちていった。そして、奥の何かが暴れる。蓋をして、無視してきた何かが騒ぎ出す。それが殺してきた感情なのかな、と冬夜は静かに考え、蓋を強く押し付けた。
「……だったら、いいな」
冬夜は西浦に背を向けて、階段を下りた。そのまま廊下を抜けて、下駄箱にたどり着く。
「それじゃ、また明日」

西浦は、冬夜の返事を待たずに去っていった。そこで思い出す。
「……明日って、来るつもりないんだけどな」
結局、明日、文化祭を休むと言えずに、冬夜は学校を後にした。そして文化祭前のせいか、少し雰囲気の違う学校を遠くから眺めて、冬夜は思う。何のために俺は学校に来たんだろう――冬夜は帰路の途中で大きなため息をついた。

＊

冬夜が家に着いたと同時に、夕夏も表に出てきた。顔は青く、いつものように「学校は？」などと声をかけてこない。それほどに余裕が無い夕夏を見るのは久しかった。
「どうかしたのか？」
冬夜は思わず尋ねた。穏やかに刺激しないように心がけたのに、夕夏の焦りは消えない。
「祐介さんがっ……！」
上村が、と冬夜も口ずさむ。
「入院したの！」
「は？」
冬夜は訝しむように眉をひそめた。何故、と続けて尋ねる。
「複数の、人に襲われた、って」
これから病院行ってくる、と夕夏は自転車に跨った。その後ろ姿に、冬夜は最後の質問を投げかける。
「どこの病院？」
「県病！」
夕夏はそれ以上は何も言わずに、自転車を漕ぎ出した。冬夜は、それを呆然と見送る。漠然とした嫌な予感に包まれていた。やがて、自転車の方向を変えて、冬夜も自転車を漕ぎ出す。向かう先は言うまでもない。夕夏の言った県立病院だ。

＊

「……お前まで来るとは思わなかったよ」

上村は軽く笑ってみせる。しかし、顔はミイラのように包帯でぐるぐる巻きにされていて、冬夜は笑えなかった。何があった、と尋ねるも、僅かに首を横に振るだけだった。

足が吊られている。分厚く固められた上村の右足を見つめ、冬夜は思わず吹き出した。

「ちょっと……何がおかしいのよ？」

じろりと夕夏に睨まれて、冬夜は目を逸らした。本当に自分が手を下さなくても、いつか死んでくれるような気がした、なんて口が裂けても言うつもりはなかった。

やがて、沈黙が流れる。冬夜は静かに病室を後にした。上村の視線を、その背中でひしひしと感じた。

病室から少し離れたロビーで空いている席に腰を下ろした。ブラウン管の分厚いテレビがニュースを流している。しかし、高校生一人が集団暴行を受けて、入院したという情報は無かった。冬夜は背もたれに身を預けて、そっと息を吐いた。

そのまま、ぼんやりとニュースを眺め、夕夏を待つ。ニュースが終わり、次の番組が始まった頃、ようやく夕夏がロビーに姿を現した。どこか不機嫌そうで、冬夜は身構える。

「……兄ちゃんに用があるって」

ぼそり、と夕夏は言った。

「分かった。すぐ済ませてくるから、待ってろ」

「先、帰る」

「待ってろ」

「何――」

「何度も言わせるな」

冬夜の眼光に気圧されて、夕夏は息を飲んだ。やがて、小さくうなづく。それを見て、冬夜はロビーを抜け、上村の病室に向かう。

「よう、色男」
先ほどは夕夏がいて、言えなかった皮肉を吐きながら、冬夜は病室に踏み込んだ。上村の横までやってきて、彼の顔をのぞき込む。
「夕夏を待たせてる。だから、さっさと教えろ。何があった？」
「お前にしちゃ賢明じゃないか」
「お褒めの言葉は今度でいい。さっさと言え」
冬夜は、上村の右足をデコピンしながら言った。上村は顔色一つ変えない。むしろ、冬夜の指が痛かった。
「お前に助けられた日、あったろ？」
「ああ……あいつらなんだな？」
そうだ、と上村は小さくうなづく。
「まったく……小さいことをやるもんだな」
「今回は三人じゃない。もっとたくさん人がいた」
そう、と冬夜は素っ気なく返す。しかし、上村の瞳に浮かぶ焦りを見て、眉をひそめた。
「まだ何かあるのか？」
「あいつらは、お前の住所を知りたがってた」
「教えたのか？」
「馬鹿野郎、そんなことしねえよ。結果がこれだ」
上村は腕を広げてみせる。どこかが痛んだのか、上村は小さく唸った。
「じっとしてろよ。馬鹿か、お前」
「それはいい……それよりも、俺の学校はバレた。あいつらは念のために、学校に行くって言ってやがったんだ」
ほう、と冬夜は返した後に、小さく唸る。
「今日は、それらしきを見てないな」
「たぶん、明日、だと思う」
上村の目は笑っていない。どこか苦々しげな色を浮かべていた。
「文化祭となると、外のヤツが自由に出入りできるからか？」
冬夜が尋ねると、上村は「そうだ」と答えた。

「そこまで賢い連中かね？」
「だからと言って、無警戒で過ごすのも馬鹿らしいだろうが」
上村の声が少し荒れた。そして激しく咳きこむ。その背中をさすることもなく、冬夜は冷たい瞳で、上村を見下ろす。
「で、俺を呼んだ用件は？」
「……何かあった時、夕夏を守ってほしい」
「馬鹿か、お前」
再び同じセリフを吐いて、冬夜は苦笑で返す。
「妹を守らない兄が、どこにいる？」
「そう……だな」
上村の瞳に安堵の色が浮かぶ。そして眠いと小さく呟いた。
「寝ろ」
ついでに死ね、と心の中で呟き、冬夜は病室を後にした。
さて、どうしたものか――冬夜はロビーで待たせている夕夏の下に向かいながら、考える。
ベストの選択肢は、明日の文化祭に夕夏を参加させないことだった。つまり、自宅謹慎が楽で確実だ。念のために冬夜も家で待機しながら、サボれるという特典付きだが、ハードルが高い。高校に入って、初めての文化祭を休めと言われて、夕夏が受け入れるような気がしなかった。こればかりは上村の力を借りても難しいのではないかと思えるほど、夕夏は文化祭を楽しみにしているのだ。
案の定、ロビーで待っていた夕夏に尋ねてみるも、一蹴される。
「嫌だよ、行きたい。祐介さんと一緒できないは悲しいけど」
「その上村のお願いなんだが」
冬夜が言うと、夕夏は少し悩んだ。
「……だったら、何で私に直接言わないわけ？」
しまった、と冬夜は内心で舌打ちを漏らす。こうなると、もう一つの手段しかなかった。しかし、それを思うと、冬夜は憂鬱になった。
二人は病院を出て、それぞれの自転車に跨った。行くつもりなん

て無かったんだけどな、と冬夜は呟く。それは町の喧噪に呑まれていって、夕夏は気づかなかった。どうやら、今回の文化祭は参加しなければならないようだ。

文化祭

太陽が顔を出した。地平線から溢れんばかりの光を発し、町の闇を一瞬にして消し去ってゆく。その光が町を起こすかのように、喧噪は広がっていった。人が動き始め、自動車が走り出す。

そんな中、冬夜は自室で膝を抱えてベッドに座っている。一時間ほど前には既に目覚めていた。しかし、その体勢になってからも、まるで眠っているかのように静かに息だけをしていた。ただ、眠っていないことを示すのは、血走った両眼だった。

守るために戦う――それは冬夜にとって初めての行為だった。おかしな話だった。何故、自分は上村の頼みを聞き入れているのか。また、夕夏を家に閉じこめておけば、簡単に話が済む話なのに、難しい手段を選んだのか。多数の感情が絡み、冬夜は胸に締め付けられるような痛みを覚えた。しかし、それも刹那的で次の瞬間には忘れ去っていた。相変わらず血走った眼で、小さく同じ言葉を呟いている。守る戦いだ、と。

湧き上がる高揚は消し去っても、すぐにまた顔を出す。その作業を繰り返す内に、湧き上がる高揚の量が減ってきたように思える。幾分か落ち着くことができたと確信を得るまで、冬夜はそれを繰り返した。

やがて、冬夜はゆらりとベッドから下りて、立ち上がった。眠そうな目に気だるげな動作で、ゆっくりと着替えをする。上は黒いパーカー、下は学校指定の長ズボンで、パーカーのポケットには刃を一本ずつ放り込み、ズボンのポケットには財布と家の鍵を放り込んだ。

静かな部屋に衣擦れの音と時を刻む音だけが響く。ふと時計に目をやると、六時半だった。そろそろ出なければならない。冬夜は音もなく、部屋を抜けた。そして、玄関は特に気を遣うことなく、派手に音を立てて出た。その代わりに素早い動作で自転車に跨り、ペ

ダルを踏み込む。冬夜は振り返ることもなく、家を離れてゆく。その際、背中に視線を感じることは無かった。

ペダルを踏む身体は軽い。昨晩は負荷のかかるトレーニングを避け、ストレッチだけで済ませた。お陰で、現状ではベストに近いコンディションだった。とは言え、筋力がつくほどの時間は経っていない。自分の体力を過信してはいけないだろう――軽く考察を終えて、冬夜は思考を切り替える。

時計はまもなく七時になる。文化祭が始まるのは十時。それまでに、やることはたくさんある。

冬夜はまず学校に向かった。まだ七時を回ったばかりなのに、文化祭当日とあってか、早くから来て作業をしている生徒も多かった。

そのためか、冬夜の姿を見て、少し怪訝そうな顔つきになる同級生もいた。あれほど文化祭の準備に対し、非協力的だった冬夜が、こんな時間に登校しているのが不思議だったのだろう。仕方のないことだ、と冬夜は割り切って、下駄箱に向かった。もう誰も下駄なんて履いてないのにな、と冬夜は不意におかしくなって吹き出した。

冬夜は自分の教室に向かわなかった。職員室に向かい、外来用のパンフレット一冊を手に取った。ざっと見て、どこのクラスがどんな出し物をするのか目を通す。やがて、冬夜の口角が僅かに上がる。一見すると嬉しそうに目を細めているようにも見えた。しかし、よく見ると、その瞳の濁りは酷かった。

パンフレットを元の場所に戻し、今度こそ階段を上る。しかし、冬夜の教室のあるフロアを通り過ぎて、更に上のフロアへと向かった。そこは一年生の教室が並ぶ廊下だった。ずらっと並ぶ九個の教室、この中の一つが夕夏の教室なのだろう。そう言えば夕夏を巻き込まないように戦うには、このフロアは避けなければならない。つまり、二年生と三年生のフロアを主戦場にするしかない。冬夜は足を止めることなく考える。パンフレットの内容を思い返し、優位に戦える構図を作り上げていく。

よし、と小さく息を吐き、冬夜は学校を後にした。やるべきこと

は、まだまだある。

＊

時計の針が九時半を回った。ようやく外来が校内に流れ込み始めた。喧噪が一際大きくなる。父兄だけでなく、他校の生徒も私服で混じっていた。

そこに険しい表情の男が十人ほど、流れに混じって校内に侵入した。目配せをして、散り散りになってゆく。目的は言うまでもない。

しかし、冬夜はまだ学校に戻っていなかった。

＊

「本当に来なかったね」

一人の少女が言った。教室はしんみりとした空気が充満していた。

「準備も一切手伝わなかったんだ。当日だけ楽しみにきてたら、笑えないぜ」

また一人、今度は男子が口を開いた。しんみりとしていた教室に、喧噪が渦巻く。そこで西浦が声を上げた。

「はいはい、そこまで！」

ぴたりと喧噪が止み、クラスメイトの視線が西浦に集まった。

「だったら参加しなかった南雲くんを後悔させちゃうぐらい、私たちが楽しもうよ」

微笑みながら言うも、西浦の心はずきりと痛んだ。こんなこともあるかもしれない、とと覚悟していたつもりだった。結局、覚悟なんて仰々しい言葉を使えるほどの心は固まっていなかったのだろう。崩れてゆく心が痛かった。

時計の針が十時を示す。まもなくして校内放送が、文化祭の開始を告げた。しかし、校内に冬夜の姿は無いままだ。

＊

「……いないっすね」

文化祭が始まって、三十分ほど経った。分厚い携帯電話を耳に当て、男は辺りを見渡す。

「やっぱり違う学校だったんすかね」

安直な考えだったか、と男は反省するも、リンチした男が情報を吐かなかったため、可能性としては、この学校ぐらいしか無かった。

ただの通りすがりだったのだろうか。否、あの男は言った――俺の獲物だ、と。つまり、あの二人は何かしらで知り合いなのだ。リンチで瀕死にするのではなく、じわじわと痛めつけ吐かせればよかった、と後悔しながら、男は自らの手首を見つめた。包帯が巻かれ、無理に動かせば血が滲む。それほど深い傷をつけられた。それを見る度に、男の腸は煮えくり返る。絶対に許さない――男は人の流れを逆らうように廊下を進んでいった。

＊

「お前ら、文化祭を見に来たんじゃないだろ」

二人の男の後ろに忍び寄り、冬夜はささやいた。男たちは瞬間的に振り返るも、遅かった。冬夜は片方の男の振り向きざまに合わせて蹴りを叩き込んだ。男はぐらりと揺れ、そのまま廊下に倒れた。

「お、前……！」

もう一人が拳を振りかぶる。遅い、と冬夜は距離を詰めて、みぞおちに肘を入れる。苦悶に顔を歪め、前かがみになる男の後頭部に再び蹴りを放つ。体重を乗せた蹴り下ろしで、廊下に伏せた男はぴくりとも動かなかった。

周囲は、その光景を唖然と見ていた。冬夜は、まだ意識のある男の髪を掴んで起こした。

「なぁ、何人で来てるんだ？」

「誰、が……づう！？」
冬夜は無表情で男の手の小指を掴んで、無造作に骨を折った。小気味良い音は喧噪に呑まれる。男のうなり声だけが廊下に響いた。
「あと九本」
ぞっとするほどの無表情で冬夜は薬指を掴んだ。
「じ、十二人だ！」
「そう。で、お前らみたいにペアで動いてんの？」
「そうだそうだ！　待て、全部しゃべるから！」
冬夜が手に力を込めると、男は青ざめて全てを話した。とは言え、大した情報は無かった。やはり、冬夜を狙って、やってきたらしい。
「あのな、これは俺にしては珍しい親切心からの忠告な」
冬夜はやんわりと微笑んで、男に言う。
「次やったら、学校ごと皆殺しにするからな」
「そ、そんなこと――」
「残る十人」
冬夜は男の言葉を遮って両手の指を広げた。十本の指が男の眼前に並ぶ。脂汗を流しながら、男はそれを見つめていた。
「俺は全員をノーダメージで狩る。それぐらいは簡単にできるんだ」
相変わらず冬夜は微笑んでいる。これ以上、ここにいては危険だ、冬夜は腰を上げた。そして最後に告げる。
「携帯で仲間に教えてやれよ。逃げるなら今の内だぜ、って」
それと同時に冬夜はゆったりとした足取りで、その場を去った。
しばらくして騒ぎを聞きつけた教師が、血相を変えてやってきた。気絶した男と、手を押さえて苦悶の表情を浮かべる他校の男たちを見て、教師は首を傾げた。

＊

時計の針は十一時に差し掛かるところだった。僅か一時間ほどで狩る側と狩られる側が逆転してしまったことに、冬夜は少し落胆す

る。もう少し計画性を練って、挑むべきだろう、と大きなため息をついた。
やがて、また二人組の男を見つめた。しばらくは遠目から観察する。ただ、間違えて襲ったところで、冬夜の良心は一切痛まないだろう。しかし、無駄な犠牲は避けるべきだ、と冬夜は男たちの後ろ姿を追った。男たちの視線の動きは、出し物を見ている気配はない。人を探すように顔を左右に振っている。そして、その表情は険しい。恐らく当たりだろう。冬夜は人の間をすり抜けて、二人に迫った。しかし、廊下の混み具合が酷く、なかなか進まない。これほど人が来ることは想定していなかった。
ただ、予想外にも男二人は足を止めた。耳に携帯を押し当てて、何やら言っている。その隙に冬夜は二人の後ろに迫った。
「はぁ、逃げろってどういうことだ？」
真後ろに立った冬夜にまでスピーカーの音が届く。「あいつはヤバい」と言う声が聞こえた。
「だからって、お前――」
「何、君ら。俺に狩られたいの？」
電話している男が、ようやく振り返った。驚愕と怒りが混ざり合った表情も、次の一瞬で消え去る。冬夜は、男の振り向きざまに合わせて腕を振るった。固い肘が男の顎に砕く。顎を押さえたまま、男は悶絶した。
冬夜は転がっていった携帯電話を拾い上げ、もう一人の男に投げる。
「まだ通話中だぜ、出てやれよ」
男は反射的に携帯を受け取るも、ぶるぶると震えながら首を横に振った。
「出ないの？」
「す、すまん、俺が悪かった」
よく見れば、この男も手首に包帯が巻かれていた。
「あーお前さんか」

冬夜は柔らかく微笑んで、男と肩を掴んで強引に引き寄せた。そして耳元で小さくささやく。「お前を抜けば、あと八人」と。
「すんません、本当にすんません」
男の顔は既に血色を失い、青かった。そんな様子を見て、冬夜は大きくため息を漏らした。萎えてしまったのだ。
「こんなことする馬鹿は一度死なないと直らないと思うんだが」
ポケットに入っている刃を、男の腹部に押しつけながら冬夜は微笑む。
「もう、二度としません、から」
がたがたと歯を鳴らしながらも、男は言葉を紡ぐ。つまらん、と冬夜は男を解放した。
「残る八人、全員呼べ」
「……は？」
「その携帯で連絡取って、全員呼べって言ってんだ。場所はそうだな。この校舎の三階にある二年一組で」
冬夜はそれだけ言い残して、男の前から姿を消した。

＊

十一時、教室で演劇の順番を待っていた西浦たちは、小道具を持って移動を始めた。そこで予想外の人物と遭遇する。
「南雲くん？」
学生服ではなく、黒いパーカーを羽織り、革の手袋と黒縁の眼鏡を装着した冬夜と、階段ですれ違ったのだ。
「よう、これからだな」
冬夜の声は、いつになく明るい。僅かに笑んでいた。しかし、目だけ笑っていなかった。
「う、うん、午前の部の最後だから」
どことなく雰囲気の違う冬夜に、西浦は何と言えばいいのか分からなかった。

「そうか、頑張れよ」
「え？」
冬夜の口から、あまりにも似合わない言葉が飛び出し、西浦は耳を疑う。
「あれだけ必死に頑張ってきたんだから、頑張れよって言ってんだ」
冬夜はそう言って、クラスメイトとは正反対の方向に進み始めた。
「ち、ちょっと南雲くんは？」
西浦は慌てて叫ぶも、冬夜が振り返ることはなかった。ひらひらと手を振り、そのまま去ってゆく。しかし、追って、説得している時間があるだろうか。いや、ある。西浦は冬夜の後を追うべく、階段を上り始めた。
「先に行ってて、すぐ追いつくから」
クラスメイトの返事を待たずに、西浦は駆け出す。遠くなってゆく冬夜の背中を見失わないよう、必死に駆けた。

＊

「待って、南雲くん！」
西浦は冬夜の腕を掴むも、反射的に手を離してしまった。冬夜の無表情が、いつになく恐ろしく見えた。
「早く行けよ、遅れるぞ」
それだけ言って、冬夜は奥の教室へと向かう。そこに逃げ道など無い。校舎の隅に二年一組の教室があるだけだった。
「最後、見届けてよ」
西浦は一瞬怯んだのを取り繕うように、再び冬夜の袖を掴んだ。しかし、その力は弱々しく、遠慮がちだった。
「無理だ」
「何で？」
即答する冬夜に、西浦は質問を浴びせる。何があっても、冬夜を連れていこう――西浦はそう心に決めていた。

「やることがあるんだ」
さらりと冬夜は返事をして、二年一組の教室に踏み込んだ。西浦もその後を追う。
「何を？」
「いいから、さっさと行け」
冬夜の口調が強まった。睨みつけるのとは少し違い、冷たい視線が西浦を射抜く。しかし、それに怯むことなく、西浦は「何で？」と尋ね続ける。
「納得する理由が必要か？　それを求めている間に、自分の身に危険が迫るとしても、それを知るべきだと思えるのか？」
最後の忠告だ、と冬夜は言った。冬夜は、西浦をまっすぐと見つめていた。西浦は不意にくすりと笑った。
「何だか、南雲くんと目を合わせたの、初めてな気がする」
「そんなことはどうでもいい。さっさと行け。じゃないと安全は保証できないぜ？」
「何をする気なの？」
西浦の質問に、冬夜は腕を組んで考える。やがて、彼は静かに口を開いた。
「害虫駆除かな」
毒をもって毒を制す、と冬夜は笑った。
「よく分からないよ」
「ああ、もうすぐ分かるよ」
タイムアップだ、と冬夜は西浦に歩み寄った。そして腕を引く。教室の隅まで引っ張っていき、そこで彼女の両肩を掴んだ。
「絶対に、そこを動くな。心配とか要らん。途中で入ってきたら、容赦なくぶっ飛ばす。分かったら、体育座りでもしてな」
冬夜は西浦の両肩に体重をかけて、無理矢理座らせる。西浦はワケが分からない様子で、眉をひそめていた。
その瞬間、教室の扉が開いた。冬夜は西浦に背を向けて、来場者に微笑みかける。

「よう、いらっしゃい……って、随分と人数減ったみたいだが、どうかしたのか？」
そんな冬夜に、四人の男たちは憎々しげな視線を向ける。
「誰のせいだと思ってやがる」
男は静かに口を開いた。威嚇するようで、低く唸るような声だった。
「勘違いされちゃ困る。先に手を出したのは、そっちなんだぜ？　俺はリンチされている可哀想な友人を助けるために、仕方なく動いたんだ」
「それは先ほど聞いた。その件については純粋に悪いと思う。すまんかった」
しかし、と男は続けて言う。
「今回も正当防衛と言い張るつもりか？」
「間違っちゃいないはずだ。お前らは最初から俺を目当てでやってきたんだろう？　撃退されても、文句は言えないだろうに」
「それでもやりすぎだと思わんのか」
男の言葉を、冬夜は軽く笑い飛ばす。
「一人をリンチして、今回も同じように複数でやってきたヤツらが何を言ってんだよ。寝言か？　ちゃんと起きてから学校に来いよ」
冬夜は楽しそうに返すも、後ろで見ている西浦は冷や冷やしていた。このまま話だけで済むとは思えなかったのだ。
「まぁ無差別に他の奴らを襲わなかったことに関しては、認めよう」
上から目線の冬夜に、男たちの殺気が膨らむ。
「まぁ六人は戦闘不能にさせたし、二人は戦意喪失させた。残るは四人。ここまで来れば、後は作業だからな」
四人目を解放した後に、冬夜は四人の男たちが何やら怪しげな会話を行っているのを見つけた。そこで男たちにワザと見つかって、事前に調べておいた三年の出し物、お化け屋敷に誘い込んだ。中は暗く、机などを並べて通路を作っているため、複雑な構造になっていた。そこで冬夜は四人に襲いかかり、一気に数を減らしたのであ

った。
暗闇は目撃されるリスクも少なく、冬夜のテリトリーだった。数的優位は一瞬で覆る。一人目はそっと背後に回り、首を締めて落とした。そこで三人に気づかれるも、冬夜はすぐさま闇の中に溶け込んだ。残された三人は、ようやく誘い込まれたことに気づき、お化け屋敷を抜けようとするも、背後から冬夜に襲われ、一人、また一人と狩られていった。最後の一人はお化け屋敷を抜け出た途端、暖簾から伸びてきた腕に引き戻された。その後、小さな悲鳴が漏れて、男が二度と姿を現すことはなかった。
つまり、残りが四人であることを冬夜は把握していた。そして、さっさと済ませようと、残りを誘い込んだのであった。お化け屋敷には少し申し訳ないことをしたな、と思う。しかし、罪悪感を抱くほどではなかった。
「まぁ、話で解決できんか？」
散々、挑発するような言葉を並べてきた冬夜が、そんなことを言った。西浦も男たちも「こいつは何を言ってるんだ」と本気で眉をひそめた。
「ここまでやってきておいて、話で済ませられるとでも？」
男は唸るように吐いた。
「ああ、思ってるよ。八人はデモンストレーションさ。賢明なヤツなら引くだろう。既に人数の半分以上を削られてるんだぜ？」
それに、と冬夜は付け加える。
「話で済んだ方が、再発防止に繋がると思うし」
冬夜はにこりと微笑んだ。その笑みを見て、男たちは思わず息を飲む。
西浦は、それが見えない。じっと息を潜めて、状況を見守ることしかできなかった。
「どうする？」と冬夜は気軽に尋ねた。
「分かっているのか？　現状は四対一なんだぞ？」
男の返事は穏便な気配がしなかった。冬夜は、それに首を傾げる。

「それがどうかしたか」
「それでも、お前は勝てる自信があるのか？」
「勝つ、ね……ちょっと違うかな。四対一だと手加減ができない。お前ら全員、壊すことになると思う」
冬夜は淀みの無い動作で、両側のポケットから刃を抜いた。
「まぁ、お前らを壊すことが、俺の勝ちだと言えるなら、それでも構わない」
くるりと刃を回しながら、冬夜は言う。
「本当にいいんだね、最後まで壊しても」
冬夜の口が横に裂ける。今までに見たことのないほどの驚喜を滲ませた笑みだった。瞳の濁りが消え、鈍い光が宿る。
男たちは何も言えなかった。ただ、冬夜の瞳に吸い寄せられて、言葉を失っていた。空虚を思わせる瞳の色に、希望の全てを吸い込まれたかのようだった。
「ねえ？」
冬夜が一歩進んだ。それに応じるように四人が一斉に後ろに下がった。四人が一人に圧倒されていた。
「俺のおもちゃになってくれるんだろう？」
冬夜は笑みを崩さぬまま、更に一歩進む。そのプレッシャーに耐えきれなくなったのか、四人の内の一人が吠えた。そして冬夜に突っ込む。
「馬鹿野郎、来るなら全員で来い」
冬夜は一瞬で無表情になる。そして、刃を上に放り投げ、カウンター気味に拳を打ち込んだ。拳を振り抜き、男を突き放す。派手に転がり、机を巻き込みながらも、三人の足下でようやく止まった。そして落ちてきた刃を、冬夜は綺麗にキャッチする。
「俺が手加減しなくていいように、四人を呼んだんだ。全員で来いよ」
冬夜はいつまで経っても、かかってこない三人に言った。それでも反応はない。冬夜は呆れたようにため息を漏らし、近くにあった

机に腰をかけた。
「何なんだよ、お前ら。結局、何がしたいの？」
男たちは思う――何で俺らが怒られているんだ、と。自分たちだって仲間の敵を討つという理由があったはずなのだ。しかし、圧倒的な恐怖の前に、その心は折られてしまった。
一体、何のために、ここまで来たのだろうか――男たちは、その理由すらも恐怖に呑まれて見失っていた。
「用が無いなら、さっさと帰ってくれねえか？」
冬夜は刃をポケットにしまい、机に腰掛けたまま、ぶらぶらと足を振った。
やがて、男たちは、冬夜に背を向けて静かに教室を去っていった。
「おい」
最後の一人が出ていく間際に、冬夜が呼び止める。びくりと肩を震わせながらも、男はゆっくりと振り返った。
「次はないからな」
何が楽しいのか、冬夜は笑みを浮かべて、手を振っていた。そして男たちは姿を消した。
「これにて、一件落着」
唖然としている西浦を一瞥して、冬夜は倒れた机を直し始めた。
どこが落着なんだ――西浦は内心で叫びつつも、それを表に出すことはなかった。ゆっくりと立ち上がって、冬夜と同じように机を直し始めた。
「おい、もう始まっちまうぜ？」
時計を見ると十一時十五分を回っていた。開演は、確か半からだったはずだ、と冬夜は思い返す。
「ん……間に合うと思う」
それより、と西浦は続けて言う。
「どういうことなの？」
「だから害虫駆除だって」
「どういう意味なの？」

「上村がリンチに遭って、入院したって知ってるか？」
朝礼で先生が言ってた、と西浦はうなづく。
「犯人、あいつらな」
「えっと、だからって――」
「詳しく説明するのは、面倒くさい」
最後の机を立てて、冬夜は小さく息を吐いた。
「頑張れよ、演劇」
「南雲くんは、どうするの？」
「はしゃぎすぎた。目撃者も多いだろうし、とりあえず帰る」
そう言いながら、冬夜は眼鏡と手袋をズボンのポケットに突っ込んだ。
「演劇……見ていけないかな？」
「まだ言うか」
冬夜は苦笑を漏らす。先ほどと違って、妙な威圧感は無かった。
「……悪いが無理だな」
やがて冬夜が答えた。
「頑張って成功させてくれ」
冬夜はそのまま静かに教室を後にした。下駄箱で靴を履くと、冬夜は自転車置き場の方に向かった。しかし、そこに冬夜の自転車は無かった。フェンスをよじ登って、学校の敷地を出た。
少し派手にやりすぎた。正門と裏門は恐らく教師が見張っているだろう。そこまで想定して、冬夜は学校から少し離れた雑貨店の駐輪場に自転車を置いていた。
冬夜は細道を進み、しばらくすると雑貨店が見えた。伊達眼鏡も手袋も、ここで揃えた。ただ、開店が十時だったので、少し出遅れたのであった。
自転車の鍵を外して、冬夜はペダルを踏む。帰路を悠々と帰ってゆく真っ黒な後ろ姿は、やがて見えなくなっていった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2945o/

殺人鬼の日常。

2011年12月9日03時12分発行